

五重塔

幸田露伴

青空文庫

其一

もくめるは
 木理美しき 槻 けやきどう 洞、縁にはわざと赤檜を用ひたる 岩 がんでぶ 置作り
 の長火鉢に対ひて話し敵 がたき もなく唯一人、少しは淋しさうに坐り居
 る三十前後の女、男のやうに立派な眉を何日掃ひしか剃つたる痕
 の青 と、見る眼も覚むべき雨後の山の色をとゞめて翠 みどり の勻ひ一
 しほ床しく、鼻筋つんと通り眼尻キリ、と上り、洗ひ髪をぐる／
 くと酷 むご く丸めて引裂紙をあしらひに 一本簪 いっほんざし でぐいと留めを刺し
 た色気無の様はつくれど、憎いほど 烏 まつくろ 黒にて艶ある髪の一
 綜 ふさ 二綜後れ乱れて、浅黒いながら洩気の抜けたる顔にかゝれる趣

きは、年増嫌ひでも褒めずには置かれまじき風体、我がものならば着せてやりたい好みのあるにと好色漢しれものが随分頼まれもせぬ詮議を蔭では為べきに、さりとは外見みえを捨て、堅義を自慢にした身の装り方、柄の選択えらみこそ野暮ならね高が二子の綿入れに縷子襟かけたを着て何所に紅くさいところもなく、引つ掛けたねんねこばかりは往時むかし何なりしやら疎あらい縞の糸織なれど、此とて幾度か水を潜つて来た奴なるべし。

今しも台所にては下婢おさんが器物洗ふ音ばかりして家内静かに、他には人ある様子もなく、何心なくいたづらに黒文字を舌端したさきで黽なげり躍おどらせなどして居し女、ぷつりと其を噛み切つてぷいと吹き飛ばし、火鉢の灰かきならし炭火体よく埋いけ、芋籠こぎれより小巾とり出

し、銀ほど光れる長五徳を磨きおとしを拭き銅壺の蓋まで奇麗にして、さて南部霰地なんぶあられの大鉄瓶を正然ちやんとかけし後、石尊様詣りのついでに箱根へ寄つて来しものが姉御へ御土産おみやと呉れたらしき寄木細工の小繊麗こぎようなる煙草箱を、右の手に持た鱈べつかふらお甲管きせるの煙管で引き寄せ、長閑に一服吸ふて線香の烟るやうに緩 《ゆるく》と烟りを噴はき出し、思はず知らず太息ためいき吐いて、多分は良人うちの手に入るであらうが憎いのつそりめが対むかふへ廻り、去年使ふてやつた恩も忘れ上人様に胡麻摺り込んで、強たつて此度こんどの仕事を為せうと身の分も知らずに願ねがひを上げたとやら、清吉の話しでは上人様に依え怙こひ鼻はな尻しりの御情おこころはあつても、名さへ響かぬのつそりに大切だいじの仕事を任せらるゝ事は檀家方の手前寄進者方の手前も難しからうなれば、

大丈夫此方こちに命いひつけらるゝに極つたこと、よしまたのつそりに命けらるればとて彼奴あれめに出来る仕事でもなく、彼奴の下に立つて働く者もあるまいなれば見事出来でかし損ずるは眼に見えたこととのよしなれど、早く良人うちのひとが愈御用命いひつかつたと笑ひ顔して歸つて来られ、ばよい、類の少い仕事だけに是非為て見たい受け合つて見たい、慾徳は何でも関はぬ、谷中やなか感応寺かんおうじの五重塔は川越の源太が作り居つた、嗚呼よく出来した感心など云はれて見たいと面白がつて、何日いつになく職しやうばい業いに氣のはづみを打つて居らるゝに、若し此仕事を他に奪られたら何のやうに腹を立てらるゝか肝癢を起さるゝか知れず、それも道理であつて見れば傍わきから妾の慰めやうも無い訳、嗚呼何にせよ目出度う早く歸つて来られ、ばよいと、口には

出さねど女房氣質、今朝背面うしろから我が縫ひし羽織打ち掛け着せて
 出したる男の上を氣遣ふところへ、表の骨太格子手あらく開けて、
 姉御、兄貴は、なに感応寺へ、仕方が無い、それでは姉御に、濟
 みませんが御頼み申します、つい昨晚ゆうべ酔へまして、と後は云はず異
 な手つきをして話せば、眉頭に皺をよせて笑ひながら、仕方のな
 いも無いもの、少し締まるがよい、と云ひくゝ立つて幾いくら干かの金
 を渡せば、其をもつて門口に出で何やら諄々 《くどく》 押問答
 せし末此方こなたに來りて、拳骨で額を抑へ、何も濟みませんでした、
 ありがたうござりまする、と無骨な礼を為たるも可をか笑。

其二

火は別にとらぬから此方へ寄るがよい、と云ひながら重げに鉄瓶を取り下して、属輩にも如才なく愛嬌を汲んで与る桜湯一杯、心に花のある待遇は口に言葉の仇繁きより懐かしきに、悪い請求をさへすらりと聴て呉れし上、胸に蟠屈りなく淡然と平日のごとく仕做されては、清吉却つて心羞かしく、何やら魂魄の底の方がむづ痒いやうに覚えられ、茶碗取る手もおづ／＼として進みかぬるばかり、濟みませぬといふ辞誼を二度ほど繰返せし後、漸く乾き切つたる舌を湿す間もあらせず、今頃の帰りとは余り可愛がられ過ぎたの、ホ、遊ぶはよけれど職業の間を欠いて母親に心配さするやうでは、男振が悪いではないか清吉、汝は

此頃仲町の甲州屋様の御本宅の仕事が済むと直に根岸の御別荘の御茶席の方へ廻らせられて居るではないか、良人うちのも遊ぶは随分好で汝達の先に立つて騒ぐは毎なれど、職業しごとを粗略おろそかにするは大の嫌ひ、今若し汝の顔でも見たらば又例の青筋を立つるに定つて居るを知らぬでもあるまいに、さあ少し遅くはなつたれど母おふく親ろの持病が起つたとか何とか方便は幾干でもつくべし、早う根岸へ行くがよい、五三様ごさも了わかつた人なれば一日をふて、怠惰なまけぬに免じて、見透かしても旦那の前は庇護かばふて呉るゝであらう、お朝飯がまだらしい、三や何でもよいほどに御膳を其方へこしらへよ、湯豆腐に蛤鍋はまなべとは行かぬが新漬に煮豆でも構はぬはのう、二三杯かつこんで直と仕事に走りやれ走りやれ、ホ、睡くても昨

夜をおもへば堪忍がまんの成らうに精を惜むな辛防せよ、よいは弁当も松に持たせて遣るは、と苦くはなけれど効験きぐめある薬の行きとゞいた意見に、汗を出して身の不始末を慚はづる正直者の清吉。

姉御、では御厄介になつて直に仕事に突走ります、と驚拵もうみにした手拭で額拭きく、勝手の方に立つたかとおもへば、既もうざら／＼ざらつと口の中へ打込む如く茶漬飯五六杯、早くも食ふて了つて出て来り、左様なら行つてまゐります、と肩ぐるみに頭をついと一ツ下げて煙草管きせるを収め、壺屋の煙草りやうさげ入三尺帯に、さすがは氣早き江戸ツ子氣質、草履つつかけ門口出づる、途端に今まで黙つて居たりし女は急に呼びとめて、此二三日にのつそり奴めに逢ふたか、と石から飛んで火の出し如く声を迸はしらし問ひかくれば、清

吉ふりむいて、逢ひました逢ひました、しかも昨日御殿坂で例のつそりがひとしほのつそりと、往生した鶏とりのやうにぐたりと首を垂れながら歩ある行いて居るを見かけましたが、今度此方の棟梁の対岸むかうに立つてのつそりの癖に及びも無い望みをかけ、大丈夫ではあるものゝ幾干か棟梁にも姉御にも心配をさせる其面が憎くつて面が憎くつて堪りませねば、やいのつそりめと頭から毒を浴びせて呉れましたに、彼奴の事故気がつかず、やいのつそりめ、のつそりめと三度めには傍へ行つて大声で怒鳴つて遣りましたれば漸く吃驚して梟ふくろに似た眼で我ひとの顔を見詰め、あゝ清吉あーにーいかと寝惚声の挨拶、やい、汝きさまは大分好をとこい男児になつたの、紺屋こうやの干場へ夢にでも上のぼつたか大層高いものを立てたがつて感応寺の和尚

様に胡麻を摺り込むといふ話しだが、其は正氣の沙汰か寝惚けて
 かと冷語ひやかしを驀まつかう向から与つたところ、ハ、ハ、姉御、愚鈍うすのろい奴
 といふものは正直ではありませんか、何と返事をするかとおもへ
 ば、我も随分骨を折つて胡麻は摺つて居るが、源太親方を対岸に
 立て、居るので何も胡麻が摺りづらくて困る、親方がのつそり汝きこさま
 為やつて見ろよと譲つて呉れ、ば好いけれどもうとの馬鹿に虫の好
 い答へ、ハ、ハ、憶ひ出しても、心配相に大真面目くさく云つた其
 面が可笑くて堪りませぬ、余り可笑いので憎にくつけ気も無くなり、篋べ
 棒らぼうめと云ひ捨てに別れましたが、其限りそれぎか。然へい。左様かへ、さ
 あ遅くなる、関はずに行くがよい。左様ならと清吉は自己おのが仕事
 におもむきける、後はひとりで物思ひ、戸外おもてでは無心の児童達こどもが

独楽戦こまあての遊びに声 喧しく、一人殺しぢや二人殺しぢや、醜態ぎさまを
 見よ讐かたきをとつたぞと号わめきちらす。おもへばこれも順 競争がたきの世の
 状さまなり。

其三

世に栄え富める人 は初霜月の 更うつりかへ衣かへも何の苦慮くるしみなく、絢
 に糸織おのに自己おのが好き／＼の衣着きぬて寒さに向ふ貧者の心配も知ら
 ず、やれ炉開きぢや、やれ口切ぢや、それに間に合ふやう是非と
 も取り急いで茶室成就しあげよ待合ひさしの庇廂ひさし繕へよ、夜半のむら時雨も一
 服やりながらで無うては面白く窓撲つ音を聞き難しとの贅沢いふ

て、木枯淒じく鐘の音氷るやうなつて来る辛き冬をば愉快こゝろよいも
 のかなんぞに心得らるれど、其茶室の床とこいた板削りに鉋礪かんたぐ手の冷
 えわたり、其庇廂の大和がき結ひに吹きさらされて疔癩も起すこ
 とある職人風情は、何どれほどの悪い業を前の世に為し置きて、同じ
 時候に他とは違ひ悩め困くるしませらるゝものぞや、取り分け職人仲間
 の中でも世才に疎く心好きうちのひと吾夫、腕は源太親方さへ去年いろ
 く世話して下されし節をりに、立派なものぢやと賞められし程確実たしか
 なれど、寛濶おうやうの氣質きだて故に仕事も取り脱はぐり勝で、好い事は毎
 《いつも》他ひとに奪られ年中嬉しからぬ生活くらしかたに日を送り月を迎
 ふる味気無さ、膝頭の抜けたを辛くも埋め綴つた股引ばかり我が
 夫に穿かせ置くこと、婦女をんなの身としては他人よその見る眼も羞づかし

けれど、何にも彼も貧が為^さする不如意に是非のなく、今ま縫ふ猪
 之が綿入れも洗ひ曝した松坂縞、丹誠一つで着させても着させ栄
 えなきばかりでなく見とも無いほど針目勝ち、それを先刻は頑是
 ない幼心といひながら、母様其衣^{それ}は誰がのぢや、小さいからは我^{おれ}
 衣服^{べど}か、嬉しいのうと悦んで其儘戸外^{おもて}へ駈け出し、珍らしう暖い天
 気に浮かれて小竿持ち、空に飛び交ふ赤蜻　しい譚名さへ負せら
 れて同業^{なまうち}中にも軽しめらるゝ齒痒さ恨めしき、蔭でやきもきと
 妾が思ふには似ず平氣なが憎らしい程なりしが、今度はまた何し
 た事か感応寺に五重塔の建つといふ事聞くや否や、急にむらゝ
 と其仕事を是非^す為る氣になつて、恩のある親方様が望まるゝをも
 関はず胴慾に、此様な身代の身に引き受けうとは、些^{ちと}えら過ぎる

と連添ふ妾でさへ思ふものを、他人は何んと噂さするであらう、ましてや親方様は定めし憎いのつそりめと怒つてござらう、お吉様は猶ほ更ら義理知らずの奴めと恨んでござらう、今日は大抵何方ちからにか任すと一言上人様の御定めなさる筈とて、今朝出て行かれしが未だ帰られず、何か今度の仕事だけは彼程吾夫は望んで居るゝとも此方は分に応ぜず、親方には義理もありかたが旁た親方の方に上人様の任さるればよいと思ふやうな気持もするし、また親方様の大氣にて別段怒りもなさらずば、吾夫に為せて見事成就させたやうな気持もする、ゑゝ氣の揉める、何なる事か、到底良人とてもうちには御任せなさるまいが若もいよく、吾夫の為る事になつたら、何の様にまあ親方様お吉様の腹立てらるゝか知れぬ、あゝ心配に頭あ

脳たまの痛む、また此が知れたらば女の要らぬ無益心配、其故何時も
 身体の弱いと、有情やさしくて無理な叱言こゝとを受くるであらう、もう止め
 ましよ止めましよ、あゝ痛、と薄痘痕うすいものある蒼い顔を蹙しかめながら
 即効紙の貼つてある左右の顛顛こめかみを、縫ひ物捨てゝ両手で圧へる
 女の、齡は二十五六、眼鼻立ちも醜みにくからねど美味うまきもの食はぬに
 膩あぶらけ氣き少く肌理荒れたる態あはれにて、襪ぼろぎ衣服ものにそゝけ髪かみます
 く悲しき風情なるが、つく／＼独り歎ずる時しも、台所の劃しき
 りの破れ障子がらりと開けて、母様これを見てくれ、と猪之が云
 ふに吃驚して、汝は何時から其所に居た、と云ひながら見れば、
 四分板六分板の切端を積んで現あり然くと真似まねび建てたる五重塔、思
 はず母親涙になつて、おゝ好い児ぞと声曇らし、いきなり猪之に

抱きつきぬ。

其四

當時に有名なうての番匠川越の源太が受負ひて作りなしたる谷中感応
 寺の、何処がうてんじやうに一つ批点を打つべきところ有らう筈なく、五十畳敷
 格がうてんじやう天井の本堂、橋をあぎむく長き廻廊、幾部いくつかの客殿、大和
 尚あまが居室、茶室、学徒所化しよけの居るべきところ、庫裡くり、浴室、玄関
 まで、或は莊嚴を尽し或は堅固を極め、或は清らかに或は寂さびて
 各 其宜しきに適ひ、結構少しも申し分なし。そもく、微 たる
 旧基を振ひて箇程かほどの大寺を成せるは誰ぞ。法諱おんなを聞けば其頃みの三

歳児つごも合掌礼拝すべきほど世に知られたる宇陀の朗圓上人とて、
 早くより身延の山に螢雪の苦学を積まれ、中ごろ六十余州に雲水
 の修行をかさね、毘婆舍那びばしやなの三行に寂じやくじやう静しやうの慧劍ゑけんを礪とぎ、四種
 の悉檀しつたんに済度の法音を響かせられたる七十有余の老和尚、骨は
 俗界の葷羶くんせんを避くるによつて鶴の如くに瘦せ、眼まなこは人世の紛紜
 に厭きて半睡れるが如く、固より壞空ゑくうの理を諦たひして意欲いほほの火炎を
 胸に揚げらるゝこともなく、涅槃ねはんの真まを会あして執着しやくしやくの彩色いろに心を
 染まざるゝことも無ければ、堂塔を興し伽藍を立てんと望まれし
 にもあらざれど、徳を慕ひ風を仰いで寄り来る学徒のいと多くて、
 其等のものが雨露凌たよりがもとん便宜べんぎも旧もとのまゝにては無くなりしまゝ、
 猶少し堂の広くもあれかしなつづんと独語つづかれしが根となりて、道德

高き上人の新に規模を大うして寺を建てんと云ひ玉ふぞと、此事
 八方に伝播ひろまれば、中には徒弟の伶俐りこうなるが自ら奮つて四方に馳せ
 感応寺建立に寄附を勧めて行くあるもあり、働はたらき顔に上人の高徳を演
 べ説き聞かし富豪を慫慂すくめて喜捨せしむる信徒もあり、さなきだ
 に平素ひごろより随喜渴仰の思ひを運べるもの雲霞の如きに此勢をもつ
 てしたれば、上諸侯より下町人まで先を争ひ財を投じて、我一番
 に福ふくでん田へ種子を投じて後の世を安楽やすくせんと、富者は黄金白銀
 を貧者は百銅二百銅を分に応じて寄進せしにぞ、百ひやくせん川海に入
 るごとく瞬ひまく間に金銭の驚かるゝほど集りけるが、それより世才
 に長たけたるものの世話人となり用人なり、万事万端執り行やがふて頓
 て立派に成就しけるとは、聞いてさへ小気味のよき話なり。

然るに悉しつかい皆成就の暁、用人頭の爲右衛門普請諸入用諸雜費一
 切しめくゝり、手脱てぬかる事なく決算したるに尙大金の剩あまれるあり。
 此をば如何になすべきと役僧の圓道もろとも、髮ある頭に髮無き
 頭突き合はせて相談したれど別に殊勝なる分別も出でず、田地を
 買はんか畠買はんか、田も畠も余るほど寄附のあれば今更また此
 淨財を其様な事に費すにも及ばじと思案にあまして、面倒よきなり好
 に計らへと皺枯れたる御声にて云ひたまはんは知れてあれど、恐
 るく圓道或時、思さるゝ用途みちもやと伺ひしに、塔を建てよと唯
 一言云はれし限りぎ振り向きも為たまはず、鼈甲縁の大きなる眼鏡
 の中より微なる眼の光りを放たれて、何の経やら論やらを黙と
 読み続けられけるが、いよゝゝ塔の建つに定つて例の源太に、積

り書出せと圓道が命令けしを、知つてか知らずに歟上人様に御目通り願ひたしと、のつそりが来しは今より二月程前なりし。

其五

紺とはいへど汗に褪め風に化りて異なる色になりし上、幾度か洗ひ濯がれたるため其としも見えず、襟の記印の字さへ朧気となりし絆纏を着て、補綴のあたりし古股引を穿きたる男の、髪は塵埃に塗れて白け、面は日に焼けて品格なき風采の猶更品格なきが、うろくのそくと感応寺の大門を入りにかゝるを、門番尖り声で何者ぞと怪み誰何せば、吃驚して暫時眼を見張り、漸く腰を

屈めて馬鹿丁寧に、大工の十兵衛と申しまする、御普請につきまして御願に出ました、とおづ／＼云ふ風態そぶりの何となく腑には落ちねど、大工とあるに多方源太が弟子かなんぞの使ひに來りしものならむと推察すみして、通れと一言押柄あふへいに許しける。

十兵衛これに力を得て、四方あたりを見廻はしながら森かう厳／＼しき玄関前にさしかゝり、御頼おたのまを申すと二三度いへば鼠衣せいたいの青黛あたま頭、可愛らしき小坊主の、応おと答へて障子引き開けしが、応接に慣れたるものの眼捷ぼやく人を見て、敷台までも下りず突立ちながら、用事なら庫裡の方へ廻れ、と情無く云ひ捨て、障子ぴつしやり、後どこは何方やらの樹頭きぎに啼く鶉ひよの声ばかりして音もなく響きもなし。成程と独言しつゝ十兵衛庫裡にまはりて復案内を請へば、用人爲

右衛門仔細らしき理屈顔して立出で、見なれぬ棟梁殿、何所いづくより何の用事で見えられた、と衣服みなりの粗末なるに既侮はやり軽しめた言葉遣ひ、十兵衛さらに気にもとめず、野生わたくしは大工の十兵衛と申すもの、上人様の御眼にかゝり御願ひをいたしたい事のあるつてまゐりました、どうぞ御取次ぎ下されまし、と首かうべを低くして頼み入るに、爲右衛門ぢろりと十兵衛が垢臭あたまき頭上より白の鼻緒の鼠色になつた草履穿き居る足先まで睨め下し、ならぬ、ならぬ、上人様は俗用に御関りはなされぬは、願といふは何か知らねど云ふて見よ、次第によりては我が取り計ふて遣る、と然さもく、万事心得た用人めかせる才物ぶり。それを無頓着の男の質ぶきよう朴にも突き放して、いゝ、ありがたうはござりますれど上人様に直で無うては、

申しても役に立ちませぬ事、何卒たゞ御取次を願ひまする、と此
 方の心が醇いっぽんぎ粹せんぎなれば先方の氣さきに触る言葉とも斟酌せんしやくせず推返し
 言へば、爲右衛門腹には我を頼まぬが憎くて慍いかにりを含み、理わけの解
 らぬ男ぢやの、上人様は汝きささまごとき職人等に耳は仮したまはぬとい
 ふに、取次いでも無益むやくなれば我が計ふて得させんと、甘く遇あしちへば
 附上る言分、最早何も彼も聞いてやらぬ、帰れ帰れ、と小人の常つ
 態ねとして語氣たちまち粗暴あらくなり、謬にべなく言ひ捨て立んとするに周あ
 章わてし十兵衛、ではござりませうなれど、と半分いふ間なく、五
 月蠅、喧しいと打消され、奥の方に入られて仕舞ふて茫ほんやり然と土
 間に突立つたまゝ掌ての裏うちの螢うらに脱去ぬけられし如き思ひをなしけるが、
 是非なく声をあげて復案内を乞ふに、口ある人の有りや無しや薄

寒き大寺の岑しんかん閑と、反響ひびきのみは我が耳に墮ち来れど咳しはぶき声一つ聞えず、玄関にまはりて復頼むといへば、先刻さき見たる憎気な伶俐こぼうず小僧の一寸顔出して、庫裡へ行けと教へたるに、と独語つひやきて早くも障子ぴしやり。

復庫裡に廻り復玄関に行き、復玄関に行き庫裡に廻り、終には遠慮を忘れて本堂にまで響く大声をあげ、頼むく御頼申すと叫べば、其声それより大きでか声を発いだして馬鹿めと罵りながら爲右衛門づかくと立出で、僮僕をとこども此狂漢きちがひを門外に引き出せ、騒しきを嫌ひたまふ上人様に知れなば、我等が此奴のために叱らるべしとの下知、心得ましたと先刻より僕人部屋をとこに転がり居し寺僕等立かり引き出さんとする、土間に坐り込んで出されじとする十兵衛。

それ手を取れ足を持ち上げよと多勢口　に罵り騒ぐところへ、後園の花二枝三枝剪はさんで床の眺めにせんと、境内彼方此方逍遙されし朗圓上人、木蘭色もくらんじきの無垢を着て左の手に女郎花桔梗、右の手に朱塗しゆの把りの鋏持たせられしまゝ、図らず此所に来かゝりたまひぬ。

其六

何事に罵り騒ぐぞ、と上人が下したまふ鶴の一声の御言葉に群雀ともがらの輩鳴りを歇とどめて、振り上げし拳を蔵かくすに地ところなく、禪僧の問答に有りや有りやと云ひかけしまゝ一喝されて腰の折くだけたる如き風

情なるもあり、捲り縮めたる袖を体裁きまり悪げに下して狐鼠 《こ

そく》と人の後に隠るゝもあり。天を仰げる鼻の孔より火烟も

噴べき驕慢の怒に意気昂ぶりし爲右衛門も、少しは慚はぢてや首を

俛たれ掌てを揉みながら、自己おのれが発頭人なるに是非なく、有し次第を

我田に水引きく申し出れば、瘦せ皺すぢびたる顔に深く長く痕ついた

る法令の皺すぢ溝をひとしほ深めて、につたりと徐ゆるかに笑ひたまひ、

婦女をんなのやうに軽く軟かな声小さく、それならば騒さわがずともよいこ

と、爲右衛門そなた汝がたゞ従順すなほに取り次さへすれば仔細は無うてあら

うものを、さあ十兵衛殿とやら老衲わしについて此方おいでへ可来、とんだ

気の毒な目に遇はせました、と万人うやまに尊敬うやまひ慕はるゝ人は又格別

の心の行き方、未学を軽んぜず下司をも侮あやらず、親切もに温も和やさし

く先に立て静に導きたまふ後について、迂濶な根性にも慈悲の浸
 み透れば感涙とゞめあへぬ十兵衛、段と赤土のしつとりとした
 るところ、飛石の画趣ゑびこゝろに布れあるところ、梧桐の影深く四方竹
 の色ゆかしく茂れるところなど繁り繞り過ぎて、小やかなる折戸
 を入れば、花も此といふはなき小庭の唯ものさびて、有楽形の
 燈籠に松の落葉の散りかゝり、方星宿はうせいしゆくの手水鉢に苔の蒸せる
 が見る眼の塵をも洗ふばかりなり。

上人庭下駄脱ぎすてゝ上にあがり、さあ汝そなたも此方へ、と云ひさ
 して掌に持たれし花を早速さそくに釣花活に投げこまるゝにぞ、十兵衛
 なかく怯おめず臆せず、手拭で足はたくほどの事も氣のつかぬ男と
 て為すことなく、草履脱いでのおつそりと三疊台目の茶室に入りこ

み、鼻突合はすまで上人に近づき坐りて黙　と一札する態は、礼
 儀に爛ならはねど充分に偽いつはり飾なき情こころの真実まことをあらはし、幾度か直に
 も云ひ出んとして尚開きかぬる口を漸くに開きて、舌の動きもた
 どくしく、五重の塔の、御願に出ましたは五重の塔のためでござ
 りります、と藪から棒を突き出したやうに尻もつたて、声の調子
 も不揃に、辛くも胸にあることを額やら腋の下の汗と共に絞り出
 せば、上人おもはず笑を催され、何か知らねど老衲わしをば怖いもの
 なぞと思はず、遠慮を忘れて緩ゆるりと話をするがよい、庫裡の土間
 に坐り込こんで動かずに居た様子では、何か深う思ひ詰めて来たこ
 とであらう、さあ遠慮を捨て、急やかずに、老衲をば朋とも友だち同様に
 おもふて話すがい、と飽くまで慈やさしき注こころ意ぞへ。十兵衛脆くも

梟と常 悪口受くる 銅鈴眼すずまなこに既涙はやを浮めて、唯はい、唯、唯ありが
 たうござりまする、思ひ詰めて参上まゐりました、その五重の塔を、
 斯様いふ野郎でござります、御覽の通り、のつそり十兵衛と口惜
 い譚名あだなをつけられて居る奴やつこでござりまする、然し御上人様、真実ほんと
 でござりまする、工事しごとは下手ではござりませぬ、知つて居ります
 私しは馬鹿でござります、馬鹿にされて居ります、意気地の無い
 奴でござります、虚誕うそはなか／＼申しませぬ、御上人様、大工は
 出来ませぬ、大隅流おほすみりゅうは童児こどもの時から、後藤立川二ツの流義も合点
 致して居ります、為させて、五重塔の仕事を私に為せていたゞき
 たい、それで参上まゐりしました、川越の源太様が積りをしたとは五六日
 前聞きました、それから私は寝ませぬは、御上人様、五重塔は百

年に一度一生に一度建つものではござりませぬ、恩を受けて居り
 ます源太様の仕事を奪とりたくはおもひませぬが、あゝ賢い人は羨
 ましい、一生一度百年一度の好い仕事を源太様は為るゝ、死んで
 も立派に名を残さるゝ、あゝ羨ましい羨ましい、大工となつて生
 てゐる生甲斐もあらるゝといふもの、それに引代へ此十兵衛は、
 鑿のみせうな手斧もつては源太様にだとして誰にだとして、打つ墨縄の曲ること
 はあれ万が一にも後れを取るやうな事は必ずくゝ無いと思へど、
 年が年中長屋の羽は目め板の繕ひやら馬小屋箱溝の数仕事、天道様が
 智慧といふものを我われには賜くださらない故仕方が無いと諦めて諦めて
 も、拙まづい奴等が宮を作り堂を受負ひ、見るものの眼から見れば建
 てさせた人が気の毒なほどのものを築造こしらへたを見るたびごとに、

内 自分の不運を泣きますは、御上人様、時 は口惜くて技倆うでも
 ない癖に智慧ばかり達者な奴が憎くもなりますは、御上人様、
 源太様は羨ましい、智慧も達者なれば手腕うでも達者、あゝ羨ましい
 仕事をなさるか、我おれはよ、源太様はよ、情無い此我はよと、羨ま
 しいがつひ高かうじて女房かゝにも口きかず泣きながら寐ました其夜の事、
 五重塔きさまを汝作れ今直つくれと怖しい人に吩咐いひつけられ、狼うろたへ狽へて飛
 び起きさまに道具箱へ手を突込んだは半分夢で半分現うつつ、眼が全く
 覚めて見ますれば指の先を鐔つばのみ鑿みにつつかけて怪我をしながら道
 具箱につかまつて、何時の間にか夜具の中から出て居た詰らなさ、
 行あんどん燈どんの前につくねんと坐つて嗚呼情無い、詰らないと思ひまし
 た時の其心持、御上人様、解りまするか、忽とち、解りまするか、

これだけが誰にでも分つて呉れ、ば塔も建てなくてもよいのです、
どうせ馬鹿なのつそり十兵衛は死んでもよいのでござりまする、
腰拔鋸のこのやうに生て居たくもないのですは、其夜それからといふものは
眞実ほんと、眞実でござりまする上人様、晴れて居る空を見ても燈光あかり
の達とぎかぬ室へやの隅の暗いところを見ても、白木造りの五重の塔がぬ
つと突立つて私を見下して居りまするは、とう／＼自分が造りた
い気になつて、到底とても及ばぬとは知りながら毎日仕事を終ると直に
夜を籠めて五十分一の雛形をつくり、昨夜で丁度仕上げました、
見に来て下され御上人様、頼まれもせぬ仕事は出来て仕たい仕事
は出来ない口惜さ、ゑゝ不運ほど情無いものはないと私わしが歎けば
御上人様、なまじ出来ずば不運も知るまいと女房かめが其雛形そをば

揺り動かしての述懐、無理とは聞えぬだけに余計泣きました、御上人様御慈悲に今度の五重塔は私に建てさせて下され、拝みます、こゝ此通り、と両手を合せて頭を畳に、涙は塵を浮べたり。

其七

木彫の羅漢のやうに黙々と坐りて、菩提樹の実の珠数^{ずぐ}繰りながら十兵衛が埒なき述懐に耳を傾け居られし上人、十兵衛が頭を下ぐるを制しとゞめて、^{わか}了解りました、能く合点が行きました、あゝ殊勝な心掛を持つて居らるゝ、立派な考へを蓄へてゐらるゝ、学徒どもの示しにも為たいやうな、^{わし}老衲も思はず涙のこぼれました、

五十分一の雛形とやらも是非見にまゐりませう、然し汝に感服し
 たらばとて今直に五重の塔の工事を汝に任するはと、かるはずみ 軽忽な
 ことを老衲のひとりぎめ 独断で云ふ訳にもならねば、これだけははつきり 明瞭
 とことわつて置きます、いづれ頼むとも頼まぬとも其は表立つ
 て、老衲からではなく感応寺から沙汰を為ませう、兎も角も幸ひ
 今日ひまは閑暇のあれば汝が作つた雛形を見たし、案内して是より直
 に汝が家へ老衲を連れて行ては呉れぬか、とすこし 毫もやうだい 辺幅を飾らぬ
 人の、すぢみち 義理明かに言葉渋滞なく云ひたまへば、十兵衛満面に笑
 を含みつゝ米舂くごとく無暗に頭を下げて、はい 唯、唯、唯と答へ居
 りしが、願ひを御取上げ下されましたか、あゝ有難うござります
 る、わたくし 野生の宅へ御来臨下さりますると、あゝ勿体ない、雛形は

直に野生めが持つてまゐりまする、御免下され、と云ひさま流石ののつそりも喜悦に狂して平素つねには似ず、大袈裟に一つぽつくりと礼をばするや否や、飛石に蹴躓こつきながら駈け出して我家に帰り、帰つたと一言女房にも云はず、いきなりに雛形持ち出して人を頼み、二人して息せき急ぎ感応寺へと持ち込み、上人が前にさし置きて帰りけるが、上人これを熟視よくみたまふに、初重より五重までのつりあひ配合、屋根庇廂の勾配、腰の高さ、椽木たるきの割賦わりふり、九輪くりん請花うけばな露盤ろばん宝珠ほうじゆの体裁まで何所に可厭いやなるところもなく、水際立つたる細工ぶり、此が彼不器用らしき男の手にて出来たるものかと疑はるゝほど巧緻たくみなれば、独り私ひそかに歎じたまひて、箇程の技倆を有ちながら空しく埋もれ、名を発せず世を経るものもある事か、傍わ

眼きめにさへも氣の毒なるを当人の身となりては如何に口惜きことな
 らむ、あはれ如かゝる是ものに成るべきならば功名てがらを得させて、多年抱
 ける心こゝろだのみ願そむに負かざらしめたし、草木とともに朽て行く人の身
 は固より因縁いんねん仮け和合わがふ、よしや惜むとも惜みて甲斐なく止めて止
 まらねど、仮令たとへば木匠こたくみの道は小なるにせよ其に一心の誠を委ね
 生命を懸けて、慾も大概あらましは忘れ卑劣きたなき念おもひも起さず、唯只鑿をも
 つては能く穿ほらんことを思ひ、鉋かんを持つては好く削らんことを思
 ふ心の尊さは金にも銀にも比たぐへ難きを、僅に残す便宜よすがも無くて徒
 らに北郎ほくぼうの土うづに没うづめ、冥途よみぢの苞つとと齎つとし去らしめんこと思へば憫あ
はれ然至極なり、良馬主しゅうを得ざるの悲み、高士世たかしよに容れられざるの恨
 みも詮ずるところは異かはることなし、よし、よく、我われ図らずも十兵衛

が胸に懐ける無価の宝珠の微光を認めしこそ縁なれ、此度の工事を彼に命いひつけ、せめては少しの報酬むくいをば彼が誠実まことの心に得させんと思はれけるが、不図思ひよりたまへば川越の源太も此工事を殊の外に望める上、彼には本堂庫裏くり客殿作らせし因みもあり、然も設つ計もりがき予算まで既做はやなし出して我眼に入れしも四五日前なり、手腕うでは彼とて鈍とんきにあらず、人の信用うけは遙に十兵衛に超たり。一ツの工事に二人の番匠、此にも為せし彼にも為せし、那箇いづれにせんと上人も流石これには迷はれける。

其八

明日辰の刻頃までに自身当寺へ来るべし、予て其方工事仰せつ
 けられたきむね願ひたる五重塔の儀につき、上人直接ちきに御話おはなし示あ
 るべきよしなれば、衣服等失礼なきやう心得て出頭せよと、おごそ嚴
か格に口上を演ぶるは弁舌自慢の圓珍とて、唐辛子をむぎと嗜たしなみ
くら食へる崇り鼻の頭さきにあらはれたる滑稽納所おどけなつしよ。平日ふだんならば南蛮和
 尚といへる諱名を呼びて戲談口き、合ふべき間なれど、本堂建立
 中朝夕顔を見しより自然おのづと狎なれし馴染みも今は薄くなりたる上、
 使僧らしう威儀をつくろひて、人さし指中指の二本でやゝもすれ
 ば兜背形とつばいなりの頭顱あたまの頂上てつぺんを搔く癖ある手をも法衣ころもの袖に殊勝く
 さく隠蔽かくし居るに、源太も敬ひ謹んで承知の旨を頭下つゝ答へけ
 るが、如才なきお吉は吾夫をかゝる俗僧づくにふにまで好く評いはせんと

てか帰り際に、出したまゝにして行く茶菓子と共に幾干錢か包み込み、是非にといふて取らせけるは、思へば怪しからぬ布施の仕様なり。圓珍十兵衛が家にも詣りて同じ事を演べ帰りけるが、其翌日となれば源太は鬚剃り月代して衣服をあらため、今日こそは上人の自ら我に御用仰せつけらるゝなるべけれど勢込んで、庫裏より通り、とある一間に待たされて坐を正しくし扣へける。

態こそ異れ十兵衛も心は同じ張を有ち、導かるゝまゝ打通りて、人気の無きに寒さ湧く一室の中に唯一人兀然として、今や上人の招びたまふか、五重の塔の工事一切汝に任すと命令たまふか、若し又我には命じたまはず源太に任すと定めたまひしを我にことわるため招ばれしか、然にもあらば何とせん、浮むよしなき埋れ

木の我が身の末に花咲かむ頼みも永く無くなるべし、唯願はくは
 上人の我が愚やみぢと暗路やみぢに物を探るごとく念想おもひを空に漂はすこと良や
 久しきところへ、例の伶俐こぼうず気な小僧こぼうずいで来りて、方丈さまの召
 しますほどに此方へおいでなされまし、と先に立つて案内すれば、
 素破すはや願望のぞみの叶ふとも叶はざるとも定まる時ぞと魯鈍おろかの男も胸を
 騒がせ、導かるゝまゝ随ひて一室の中へずつと入る、途端に此方
 をぎろりつと見る眼鏡く怒を含むで斜に睨むは思ひがけなき源太
 にて、座に上人の影もなし。事の意外に十兵衛も足踏みとめて突
 立つたるまゝ一言もなく白眼にらみ合ひしが、是非なく畳二ひらばかり
 を隔てしところに漸く坐り、力なげ首梢しをく然と己れが膝いきほひに氣勢
 のなきたさうなる眼を注ぎ居るに引き替へ、源太郎は小狗こいぬを瞰下みおろ

すあらわし猛鷲の風に臨んで千尺の巖の上に立つ風情、腹に十分の強みを抱きて、背をも屈指ねば肩をも歪めず、すつきりしやん端然と構へたる風姿やうだいと云ひ面貌きりやうといひ水際立つたる男振り、万人が万人とも好かずには居られまじき天晴小気味のよき好漢をそこなり。

されども世俗の見解けんげには墮ちぬ心の明鏡に照らして彼れ此れ共に愛し、表面うはべの美醜なづに露泥なづまれざる上人の却つて何れをとも昨日までは扱あびかねられしが、思ひつかるゝことのありてか今日はおさゞく二人を招び出されて一室に待たせ置かれしが、今しも静居間を出られ、畳踏まるゝ足も軽く、先に立つたる小僧こぼうずが襖うやまつ明くる後より、すつと入りて座につきたまへば、二人は恭うやまつひ敬みて共に齊しく頭を下げ、少時上げも得せざりしが、嗚呼いぢらしや

十兵衛が辛くも上げし面には、未だ世馴れざる里の子の貴人の前
 に出しやうに差はぢを含みて紅潮さし、額の皺の幾条の溝には沁にしみ出し熱あ
 汗せを湛へ、鼻の頭さきにも珠を湧かせば腋の下には雨なるべし。膝に
 載おきたる骨太の掌指ゆびは枯れたる松まつ枝がえごとき岩畳作りにありなが
 ら、一本ごとに其さへも戦 《わなく》顛へて一心に唯上人の
 一言を一期いちじの大事と待つ笑止さ。

源太も黙して言葉なく耳を澄まして命を待つ、那方どちらを那方と判
 かぬる、二人の情こころを汲みて知る上人もまた中ちゆうに口を開かん便宜よすが
 なく、暫時は静まりかへられしが、源太十兵衛ともに聞け、今度
 建つべき五重塔は唯一ツにて建てんといふは汝達二人、二人の願
 ひを双方とも聞き届けては遣りたけれど、其は固より叶ひがたく、

一人に任さば一人の歎き、誰に定めて命いひつけんといふ標きめどころ準のあ
 るではなし、役僧用人等の分別にも及ばねば老僧わしが分別にも及ば
 ぬほどに、此分別は汝達の相談に任す、老僧は関はぬ、汝達の相
 談の纏まりたる通り取り上げて与やるべければ、熟く家に帰つて相
 談して来よ、老僧が云ふべき事は是ぎりぢやによつて左様心得て
 帰るがよいぞ、さあ確と云ひ渡したぞ、既もはや早帰つてもよい、然し
 今日けふは老僧も閑暇ひまで退屈なれば茶話しの相手になつて少時居てく
 れ、浮世の噂なんど老衲に聞かせて呉れぬか、其代り老僧も古い
 話しの可笑なを二ツ三ツ昨日見出したを話して聞かさう、と笑顔
 やさしく、朋友ともだちかなんぞのやうに二人をあしらふて、扱何事を
 云ひ出さるゝやら。

其九

小僧こぼうずが将もつて来し茶を上人自ら汲み玉ひて侑すゝめらるれば、二
 人とも勿体ながりて恐れ入りながら頂戴するを、左様遠慮されて
 は言葉に角が取れいで話が丸う行かぬは、さあ菓子も挟んではや
 らぬから勝手に摘んで呉れ、と高たか坏つか推遣りて自らも天目取り上
 げ喉うるほを湿うるほしたまひ、面白い話といふも桑よすてびと門との老僧等には左様
 沢山無いものながら、此頃読んだ御経の中につく／＼成程と感
 心したことのある、聞いて呉れ此様いふ話しぢや、むかし某国あるの
 長者が二人の子を引きつれて麗かな天氣の節をりに、香のする花の咲

き軟かな草の滋しげつて居る広野を愉快たのしげに遊ゆき行したところ、水は
 大分に夏の初め故涸かれたれど猶清らかに流れて岸を洗ふて居る大
 きな川に出逢いであふた、其川の中には珠のやうな小磧こいしやら銀のやうな
 砂でで成て居る美しい洲のあつたれば、長者は興に乗じて一尋うしろばか
 りの流を無造作に飛び越え、彼方此方を見廻せば、洲の後面うしろの方
 もまた一尋ほどの流で陸と隔てられたる別世界、全然まるで浮世の脛なまぐ
 羶さい土地つちとは懸絶れた清浄の地であつたまゝ、独りこども歎び喜んで踊ゆ
 躍やくしたが、渉らうとしても渉り得ない二人の児童こどもが羨ましがつて
 喚よび叫ぶを可憐あはれに思ひ、汝達には来ることの出来ぬ清浄の地であ
 るが、然程に來たくば渡らして与やるほどに待つて居よ、見よく
 我が足下の此磧は一蓮華かたちの形状をなし居る世に珍しき磧なり、

我が眼の前の此砂は一五金の光を有てる比類たぐひ稀なる砂なるぞと
 説き示せば、二人は遠眼にそれを見ていよ／＼焦躁あせり渡らうとす
 るを、長者は徐しづかに制しながら、洪おほみづ水の時にても根こぎになつた
 るらしき棕櫚の樹の一尋余りなを架渡して橋として与つたに、我
 が先へ汝そなたは後にと兄弟争せめひ闘いだ末、兄は兄だけ力強く弟を終に
 投げ伏せて我意の勝を得たに誇り高ぶり、急ぎ其橋を渡りかけ半
 途かばに漸く到りし時、弟は起き上りさま口惜さに力を籠めて橋を盪うご
 かせば兄は忽ち水に落ち、苦しみ躓いて洲に達せしが、此時弟は
 既はや其橋を難なく渡り超えかくるを見るより兄も其橋の端を一揺り
 揺り動せば、固より丸木の橋なる故弟も堪らず水に落ち、僅に長
 者の立つたるところへ濡れ滴りて這ひ上つた、爾そのとき時長者は歎息

して、汝達には何と見ゆる、今汝等が足踏みかけしより此洲は忽たち
ちまち然前と異なり、積は黒く醜くなり沙すなは黄ばめる普通つねの沙となれ
 り、見よく如何にと告げ知らするに二人は驚き、眼まなこを睜こりて見
 れば全く父の言葉に少しも違はぬ沙積、あゝ如是かゝるもの取らんとて
 可愛き弟を悩せしか、尊き兄を溺らせしかと兄弟共に慚ぢ悲みて、
 弟の袂もすそを兄は絞り兄の衣裾もすそを弟は絞もすそりて互いひに恤いたはり慰めけるが、
 彼橋をまた引き来りて洲うしろの後面なる流れに打ちかけ、既はや此洲には
 用なければ尚も彼方に遊び歩かん、汝達先づこれを渡れと、長者
 の言葉に兄弟は顔を見合ひて先刻には似ず、兄上先に御渡りなさ
 れ、弟よ先に渡るがよいと譲合ひしが、年順なれば兄先づ渡る其
 時に、転びやすきを氣遣ひて弟は端を揺がぬやう確と抑ゆる、其

次に弟渡れば兄もまた揺がぬやうに抑へやり、長者は苦なく飛び越えて、三人ともに最長閑く徐に歩む其中に、兄が図らず拾ひし石を弟が見れば美しき蓮華の形をなせる石、弟が摘み上げたる砂を兄が覗けば眼も眩く五金の光を放ちて居たるに、兄弟とも／＼
 ろこ 歡喜び樂み、互に得たる幸福を互に深く讚歎し合ふ、爾時
 ふところ 長者は懐中より眞実の璧の蓮華を取り出し兄に与へて、弟にも
 たま 眞実の砂金を袖より出して大切にせよと与へたといふ、話して仕舞へば小供欺しのやうぢやが仏説に虚言は無い、小児欺しでは決してない、噛みしめて見よ味のある話ではないか、如何ぢや汝
 なたち 等にも面白いか、老僧には大層面白いが、と軽く云はれて深く浸む、譬喩方便も御胸の中に有たる、眞実から。源太十兵衛二

人とも顔見合せて茫然たり。

其十

感応寺よりの帰り道、半分は死んだやうになつて十兵衛、どん
つく布子ぬのこの袖組み合はせ、腕拱きつゝ迂濶 《うか／＼》歩き、

御上人様の彼様あゝ仰やつたは那方どちらか一方おとなしく譲れと諭しの謎

とは、何程愚鈍おろかな我おれにも知れたが、嗚呼譲りたく無いものぢや、

折角丹誠に丹誠凝らして、定めし冷て寒からうに御寝みなされと
親切で為て呉るゝ女房かの世話までを、黙つて居よ余計なと叱り飛
ばして夜の眼も合さず、工夫に工夫を積み重ね、今度といふ今度

は一世一代、腕一杯の物を建てたら死んでも恨は無いとまで思ひ込んだに、悲しや上人様の今日の御諭し、道理には違ひない左様も無ければならぬ事ぢやが、此を譲つて何時また五重塔の建つといふ的あてのあるではなし、一生到底とても此十兵衛は世に出ることのならぬ身か、嗚呼情無い恨めしい、天道様が恨めしい、尊い上人様の御慈悲は充分了つて居て露ばかりも難有う無は思はぬが、吁何あどうにも彼かうにもならぬことぢや、相手は恩のある源太親方、それに恨の向けやうもなし、何様しても彼様しても温順すなほに此方こちの身を退くより他に思案も何も無い歟、嗚呼無い歟、といふて今更残念な、なまじ此様な事おもひたゝずに、のつそりだけで済して居たらば此様に残念な苦惱おもひもすまいものを、分際忘れた我おれが悪かつた、嗚呼

我が悪い、我が悪い、けれども、ゑゝ、けれども、ゑゝ、思ふま
 いく、十兵衛がのつそりで浮世の伶俐りこうな人等たちの物笑ひになつて
 仕舞へばそれで済むのぢや、連添ふ女房にまでも内はたらき 活用の利
 かぬ夫ぢやと唧かこたれながら、夢のやうに生きて夢のやうに死んで仕
 舞へば夫で済む事、あきらめて見れば情無い、つく／＼世間が
 詰らない、あんまり世間が酷むご過ぎる、と思ふのも矢張愚痴か、愚
 痴か知らねど情無過ぎるが、言はず語らず諭された上人様の彼御
 言葉の真実のところを味はへば、飽まで御慈悲の深いのが五臟六
 腑に浸み透つて未練な愚痴の出端でばも無い訳、争ふ二人を何方にも
 傷つかぬやう捌さばき玉ひ、末の末まで共に好かれと兄弟の子に事寄
 せて尚たふとい御経を解きほぐして、噛んで含めて下さつた彼御話に比

べて見れば固より我は弟の身、ひとしほ他ひとに譲らねば人間ひとらしく
 も無いものになる、嗚呼弟とは辛いものぢやと、路も見分かで屈
 托まなこの眼は涙なみだに曇りつゝ、とぼくとして何一ツ愉快たのしみもなき我家の
 方に、糸で曳かるゝ木偶でくのやうに我を忘れて行く途中、此馬鹿野
 郎きちがひ発狂漢ひとめ、我の折角洗つたものに何する、馬鹿めと突だしぬけ然にに嘔
 つく如く罵られ、癩張声に胆を冷してハツと思へば瓦落離顛倒、
 手桶枕に立てかけありし張物板に、我知らず一足二足踏みかけて
 踏み覆したる不体裁ざまのなさ。

尻餅ついて驚くところを、狐憑つきめ忌しい、と駄力ばかりは近
 江のお兼、顔は子供の福笑戯ふくわらひに眼を付け歪めた多福面おかめの如き房
 州出らしき下婢おさんの憤怒、拳を挙げて丁と打ち猿臂ゑんびを伸ばして突き

飛ばせば、十兵衛堪らず汚塵ほこりに塗れまみ、はいく、狐つまに誑つままれまし
 た御免なされ、と云ひながら悪口雑言聞き捨に痛さを忍びて逃げ
 走り、漸く我家に帰りつけば、おゝ御帰りか、遅いので如何いふ
 事かと案じて居ました、まあ塵埃まぶれになつて如何どうなされまし
 た、と払ひにかゝるを、構ふなど一言、氣の無ささうな声で打消
 す。其顔を覗き込む女房の真実心配さうなを見て、何か知らず無
 性に悲しくなつてぢつと湿うるみのさしくる眼、自分で自分を叱るやう
 に、ゑゝと凶らず声を出し、煙草を捻つて何気なくもてなすこと
 はもてなすものゝ言葉も無し。平時つねに変わる状ありさま態を大方それと
 推察すゐして扱慰すべむる便もなく、問ふてよきやら問はぬが可きやら心
 にかゝる今日の首尾をも、口には出して尋ね得ぬ女房は胸を痛め

つゝ、其一本は杉箸で辛くも用を足す火箸に挟んで添へる消炭の、あはれ甲斐なき火力ちからを頼り土瓶の茶をば温ぬくむるところへ、遊びに出たる猪之の戻りて、やあ父様帰つて来たな、父様も建てるか坊も建てたぞ、これ見て呉れ、と然さも勇ましく障子を明けて褒められたさが一杯に罪無く莞爾にこりと笑ひながら、指さし示す塔の模まね形かた。母は襦袢の袖を噛み声も得たてず泣き出せば、十兵衛涙に浮くばかりの円つぶらの眼を剥き出し、ぎもせでぐいと睨めしが、おで出来かした出来した、好く出来た、褒美を与らう、ハツハ、と咽び笑ひの声高く屋の棟にまで響かせしが、其まゝ頭を天に対はし、嗚呼、弟とは辛いなあ。

其十一

格子開くる響爽かなること常の如く、お吉、今帰つた、と元氣
 よげに上り来る夫の声を聞くより、心配を輪に吹きく吸て居し
 煙草管きせるを邪見至極に抛り出して忙はしく立迎へ、大層遅かつたで
 はないか、と云ひつゝ、背面うしろへ廻つて羽織を脱せ、立ながら腮あごに手
 伝はせての袖畳み小早く室隅すみの方に其儘さし置き、火鉢の傍へ直
 また戻つて火たちまち急鉄瓶に松虫の音を発おこさせ、むづと大胡坐かき込
 み居る男の顔を一寸見しなに、日は暖かでも風が冷く途中は随分
 寒ひえましたろ、一瓶ひとつ煖酒つけましよか、と痒いところへ能く届かす手は
 口をきく其間ひまに、がたぴしさせず膳ごしらへ、三輪漬は袖ゆの香ゆ

かしく、大根卸おろしで食はする鮓はらこ卵ごこは無造作にして気が利たり。

源太胸には苦慮おもひあれども幾干いくらか此に慰められて、猪口把りさま

に二三杯、後一杯を漫ゆるく飲んで、汝きさまも飲やれと与ふれば、お吉一口、

つけて、置き、焼きかけの海苔のり畳み折つて、追付さんこ三子の来さうな

もの、と魚屋の名を独語しつ、猪口を返して酌せし後、上 吉と

腹に思へば動かす舌も滑かに、それはさうと今日の首尾は、大丈

夫此方のものとは極めて居ても、知らせて下さらぬ中は無益むだな苦

勞を妾は為ます、お上人様は何と仰せか、またのつそり奴は如何

なつたか、左様真面目顔でむつつりとして居られては心配で心配

でなりませぬ、と云はれて源太は高笑ひ。案じて貰ふ事は無い、

御慈悲の深い上人様は何どの道おれい我をを好漢をにして下さるのよ、ハ、ハ、ハ、

なあお吉、弟を可愛がれば好い兄あにきではないか、腹の饑へつたものには自分が少しは辛くても飯を分けてやらねばならぬ場合もある、
 他ひとの怖いことは一厘無いが強いばかりが男児をとこでは無いなあ、ハ、
 、じつと堪忍がまんして無理に弱くなるのも男児だ、嗚呼立派な男児
 だ、五重塔は名誉しごとの工事、たゞ我一人で物の見事に千年壊れぬ名
 物を万人の眼に残したいが、他の手も智慧も寸分ま交ぜず川越の源
 太が手腕だけで遺したいが、嗚呼癩癩を堪忍するのが、ゑゝ、男
 児だ、男児だ、成程好い男児だ、上人様に虚言は無い、折角望み
 をかけた工事を半分他に呉るのはつく／＼忌しけれど、嗚呼、
 辛い、ゑゝ兄あにきだ、ハ、ハ、お吉、我はのつそりに半口与つて二
 人で塔を建てやうとおもふは、立派な弱い男児か、賞めて呉れ賞

めて呉れ、汝きさまにでも賞めて貰はなくては余り張合ひの無い話しだ、
 ハ、と嬉しさうな顔もせで意味の無い声ばかりはづませて笑へ
 ば、お吉は夫の気を量りかね、上人様が何と仰やつたか知らぬが
 妾にはさつぱり分らずちつと些も面白くない話し、唐偏朴の彼あののつそり
 めに半口与るとは何いふ訳、日頃の気性にも似合はない、与るも
 のならば未練気なしすつかりに悉皆与つて仕舞ふが好いし、固より此方で
 取る筈なれば要りもせぬ助太刀頼んで、一人の首を二人で切る様
 な卑劣けちなことをするにも当らないではありませぬか、冷水で洗つ
 たやうな清潔きれいな腹を有つて居ると他にも云はれ自分でも常 云ふ
 て居た汝おまへが、今日に限つて何といふ煮切ない分別、女の妾から見
 ても意地の足らない愚図 思案、賞めませぬ賞めませぬ、何どうし

て中 賞められませぬ、高が相手は此方こちの恩を受けて居るのつそ
 り奴、一体ならば此方の仕事を先潜りする太い奴と高飛車に叱り
 つけて、ぐうの音も出させぬやうに為れば成るのつそり奴を、左
 様甘やかして胸の焼ける連れんみやうしごと名工事を何で為るに当る筈のあら
 うぞ、甘いばかりが立派の事か、弱いばかりが好い男児か、妾の
 虫には受け取れませぬ、何なら妾が一走りのつそり奴のところ
 行つて、重 恐れ入りましたと思ひ切らせて謝罪あやまらせて両手を突
 かせて来ませうか、と女賢しき夫思ひ。源太は聞いて冷笑あざわらひ、
 何が汝に解るものか、我の為ることを好いとおもふて居てさへ呉
 るればそれで可いのよ。

其十二

色も香も無く一言に黙つて居よと遣り込められて、聴かぬ氣のお吉顔ふり上げ何か云ひ出したげなりしが、自己おのれよりは一倍きかぬ氣の夫の制するものを、押返して何程云ふとも機嫌を損ずる事こそはあれ、口答への甲斐は露無きをおぼえ経験あつて知り居れば、連添ふものに心の奥を語り明して相談かけざる夫を恨めしくはおもひながら、其所はりこ憐れの女の分別早く、何も妾が遮つて女の癖に要らざるくち嘴を出すではなけれど、つい氣にかゝる仕事の話し故思はず様子の聞きたくて、余計な事も胸の狭いだけに饒舌つた訳、と自分が眞実籠めし言葉を態と極 軽う為て仕舞ふて、何所まで

も夫の分別に従ふやう表面を粧ふも、幾許か夫の腹の底に在る煩うはべ
しやくしやを殺いで遣りたさよりの真実まこと。源太もこれに角張りかゝつ

悶もを殺いで遣りたさよりの真実まこと。源太もこれに角張りかゝつ

た顔をやわらげ、何事も皆まはりあはせ天運あはせぢや、此方の了見さへ温順すなほに

和やさしく有つて居たなら又好い事の廻つて来やうと、此様おもつて

見ればのつそりに半口与るも却つて好い心持、世間は氣次第で忌

しくも面白くもなるもの故、出来るだけは卑劣けちな鏽さびを根性に着

けず瀟あつさり洒と世を奇麗に渡りさへすれば其で好いは、と云ひさし

てぐいと仰飲あふぎ、後は芝居の噂みもちやら弟子共が行状みもちの噂、真に罪無

き雑話を下物さかなに酒も過ぎぬほど心よく飲んで、下卑げびた体裁さまではあ

れどとり膳睦をまじく飯を喫は了り、多方もう十兵衛が来さうなもの

と何事もせず待ちかくるに、時は空しく経過たつて障子の日ひかげ一尺動

けど尚見え、二尺も移れど尚見え。

是非先方むかうより頭を低し身を縮すぼめて此方へ相談に來り、何卒半
なりと仕事を割わけ与て下されと、今日の上人様の御慈愛おなさけ深き御言葉
を頼りに泣きついても頼みをかけべきに、何として如かう是は遅きや、
思ひ断めて望を捨て、既早相談にも及ばずとて独り我家くすぼに燻り居
るか、それともまた此方より行くを待つて居る歟か、若しも此方の
行くを待つて居るといふことならば余り増長した了見なれど、ま
さかに其様な高慢気も出すまじ、例ののつそりで悠長に構へて居
るだけの事ならむが、扱も氣の長い男め迂濶にも程のあれと、煙
草ばかり徒らに喫ふかし居て、待つには短き日も随分長かりしに、
それさへ暮れて群鳥ねぐら塒ねぐらに帰る頃となれば、流石に心おもしろから

ず漸く癩癩の起りくゝて耐へきれずなりし潮先、据られしゆふめし晩食の膳に対ふと其儘云ひ訳ばかりに箸をつけて茶さへゆる緩りとは飲ま
ず、お吉、十兵衛めがところに一寸行て来る、行違ひになつて不
在すへ来ば待たして置け、と云ふ言葉さへとげくしく怒りを含ん
で立出かゝれば、気にはかゝれど何とせん方もなく、女房は送つ
て出したる後にて、たゞ溜息をするのみなり。

其十三

涉つて聞きかぬる雨戸に一しほ源太は癩癩の火の手をたかぶ亢らせつ
ゝ、力まかせにがちく引き退け、十兵衛家にか、と云ひさまに

突と這入れれば、声色知つたるお浪早くもそれと悟つて、恩ある其人の敵むかうに今は立ち居る十兵衛に連添へる身の面を対あはすこと辛く、女氣の纖弱かよわくも胸を動悸どきつかせながら、まあ親方様、と唯一言我知らず云ひ出したる限り挨拶ぎさへどぎまぎして急には二の句の出ざる中、煤けし紙に針の孔、油染みなんど多き行燈の小蔭しよんに悄ぼり然と坐り込める十兵衛を見かけて源太にずっと通られ、周章て火鉢の前に請ずる機転まづきの遅鈍も、正直ばかりで世態よを知のみこま悉ぬ姿なるべし。

十兵衛は不束に一礼して重げに口を開き、明日の朝参あが上らうとおもふて居りました、といへばぢろりと其顔下眼に睨み、態と泰お然ちつきたる源太、応、左様いふ其方つもりの心算であつたか、此方は例の

氣短故今しがたまで待つて居たが、何時になつて汝そなたの来るか知れたことでは無いとして出掛けて来ただけ馬鹿であつたか、ハ、ハ、然し十兵衛、汝は今日の上人様の彼お言葉を何と聞たか、ふたり兩人で熟くく相談して来よと云はれた揚句に長者の二人の兎の御話し、それで態相談に来たが汝も大抵分別は既定めて居るであらう、我も随分虫持ちだが悟つて見ればあのとへ彼譬諭の通り、尖りあふのは互に詰らぬこと、まんざら敵同士でもないに身勝手ばかりは我も云はぬ、つまりは和熟したけつちやう決けつちやう定のところけつちやうが欲い故に、我慾は充分折つてくだ摧くだいて思案を凝らして来たもの、尚汝の了見も腹蔵の無いところを聞きたく、其上にまた何様とも為やうと、我も男をとこ児こなりや汚い謀計たくみを腹には持たぬ、ほんと眞実ほんとにかう如是かうおもふて来たは、

と言葉を少時とゞめて十兵衛が顔を見るに、俯伏たまゝたゞ唯はい、唯と答ふるのみにて、乱鬢の中に五六本の白髪が瞬く燈火あかりの光を受けてちらりくくと見ゆるばかり。お浪は既はや寝し猪の助が枕の方について坐つて、呼吸さへせぬやう此もまた静まりかへり居る淋しさ。却つて遠くに売りあるく鍋焼餛飩の呼び声の、幽そとに外方より家やの中に浸みこみ来るほどなりけり。

源太はいよく氣を静め、語気なだらかに説き出すは、まあ遠慮もなく外見みえもつくらず我の方から打明けやうが、何と十兵衛斯しては呉れぬか、折角汝も望をかけ天晴名誉の仕事をして持つた腕の光をあらはし、慾徳では無い職人の本望を見事に遂げて、末代に十兵衛といふ男が意おもひつき匠おもひつきぶり細工ぶり此視て知れと残さ

うつもりであらうが、察しも付かう我とても其は同じこと、さら
に有るべき普請では無し、取り外はぐつては一生にまた出逢ふことは
覚束ないなれば、源太は源太で我が意匠おれぶり細工ぶりを是非遺し
たいは、理屈を自分のためにつけて云へば我はまあ感応寺の出入
り、汝は何の縁ゆかりもないなり、我は先口、汝は後なり、我は頼まれ
て設計つもりまで為たに汝は頼まれはせず、他の口から云ふたらばまた
我は受負ふても相応、汝が身柄がらでは不相応と誰しも難をするであ
らう、だとして我が今理屈を味方にするでもない、世間を味方にす
るでもない、汝が手腕ふだんの有りながら不ふしあはせ幸あはせで居るといふも知つ
て居る、汝が平素ふだん薄ふしあはせ命あはせを口へこそ出さね、腹の底では何どの位
泣て居るといふも知つて居る、我を汝の身にしては堪忍がまんの出来ぬ

ほど悲い一生といふも知つて居る、夫故にこそ去年一昨年何にも
 ならぬことではあるが、まあ出来るだけの世話は為たつもり、然
 し恩に被せるとおもふて呉れるな、上人様だとして汝の清潔きれいな腹の
 中を御洞察おみとほしになつたればこそ、汝の薄ふしあはせ命めいを気の毒とおもは
 れたればこそ今日のやうな御諭し、我も汝が慾かなんぞで対岸むかうに
 まはる奴ならば、我ひとの仕事に邪魔を入れる猪口才な死節野郎と一ひと
とてうな 斬いっせに脳天打欠ぶつかかずには置かぬが、つく／＼汝の身を察すれ
 ば寧いっせ仕事も呉れたいやうな気のするほど、といふて我も慾は捨て
 断れぬ、仕事は真実何あつても為たいは、そこで十兵衛、聞ても
 貰がまんひにく、云ふても退けにくい相談ぢやが、まあ如是ぢや、堪忍
 して承知して呉れ、五重塔は二人で建てう、我を主にして汝不足

でもあらうが副そへになつて力を仮してはくれまいか、不足ではあらうが、まあ厭でもあらうが源太が頼む、聴ては呉れまいか、頼むく、頼むのぢや、黙つて居るのは聴て呉れぬか、お浪さんも我わしの云ふことの了つたなら何卒口を副て聴て貰つては下さらぬか、と脆くも涙になりゐる女房にまで頼めば、お、お、親方様、ゑゝ、ありがたうござりまする、何所に此様な御親切の相談かけて下さる方のまた有らうか、何故御礼をば云はれぬか、と左の袖は露時雨、涙に重くなしながら、夫の膝を右の手で揺り動しつ搔口説けど、先刻より無言の仏となりし十兵衛何とも猶言はず、再度三度かきくどけど黙 《むつくり》として猶言はざりしが、やがて垂れたる首かうべを擡どうげ、何も十兵衛それは厭でござりまする、と無愛想

に放つ一言、吐胸をついて驚く女房。なんと、と一声烈しく鋭く、
 頸くび首ぼね反らす一二寸、眼に角たてゝのつそりを驀まつ向かうよりして瞰
 下す源太。

其十四

人情の花も失なくさず義理の幹も確しつ然かり立てゝ、普通なみのものには出
 来ざるべき親切の相談を、一方ならぬ実意じつの有ればこそ源太の懸
 けて呉れしに、如何に伐つて抛げ出したやうな性もちまへ質へが為する返
 答なればとて、十兵衛厭でござりまするとは余りなる挨拶、他ひとの
 情愛なさけの全で了らぬ土人形でも斯は云ふまじきを、さりとは恨め

しいほど没義道な、口惜いほど無分別な、如何すれば其様に無茶
 なる夫の了見と、お浪は呆れもし驚きもし我身の急に絞木にかけ
 て絞しめらるゝ如き心地のして、思はず知らず夫にすり寄り、それは
 まあ何といふこと、親方様が彼程に彼方此方のためを計つて、見
 るかげもない此方連このはうづれ、云はゞ一足に蹴落して御仕舞ひなさるゝ
 ことも為さらば成できる此方連に、大抵ではない御情をかけて下され、
 御自分一人で為さりたい仕事をも分わけ与て遣らう半口乗せて呉れう
 と、身に浸みるほどありがたい御親切の御相談、しかも御招喚およびつけ
 にでもなつてでのことか、坐蒲団さへあげることの成らぬ此様な
 ところへ態 御来臨おいでになつての御話し、それを無にして勿体ない、
 十兵衛厭でござりまするとは冥利の尽きた我儘勝手、親方様の御

親切の分らぬ筈は無からうに胴慾なも無遠慮なも大方程度ほどあひのあつたもの、これ此妾の今着て居るのも去年の冬の取り付きに袷姿の寒げなを気の毒がられてお吉様の、縫直なほして着よと下されたのとは汝の眼には暎うつつらぬか、一方ならぬ御恩を受けて居ながら親方の対岸むかうへ廻るさへあるに、それを小癩かばなども恩知らずなども仰やらず、何処までも弱い者を愛護あはふて下さる御仁慈おなげ深い御分別にも頼より継ついで一概に厭ぢやとは、仮令ば真底から厭にせよものお記き臆おそのある人間ひとの口から出せた言葉でござりまするか、親方様の手前お吉様の所おもはく思をも能く篤とつくりと考へて見て下され、妾はもはや是から先何の顔さげて厚ケ間敷お吉様の御眼にかゝることの成るものぞ、親方様は御胸の広うて、あゝ十兵衛夫婦は訳の分らぬ

愚者なりや是も非もないと、其儘何とも思しめされず唯打捨て下
 さるか知らねど、世間は汝を何と云はう、恩知らずめ義理知らず
 め、人情解せぬ畜生め、彼奴は犬ぢや鳥ぢやと万人の指甲つまめに弾か
 れものとなるは必定、犬や鳥と身をなして仕事を為たとて何の功
 名がら、慾をかわくな齷齪するなど常 妾に諭された自分の言葉に対
 しても恥かしうはおもはれぬか、何卒柔順すなほに親方様の御異見につ
 いて下さりませ、天に聳ゆる生雲塔は誰 二人で作つたと、親方
 様と諸共に肩を並べて世に称うたはるれば、汝の苦勞の甲斐も立ち親
 方様の有難い御芳志おこころざしも知るゝ道理、妾も何の様に嬉しかるか喜
 ばしかるか、若し左様なれば不足といふは薬にしたくも無い筈な
 るに、汝は天魔に魅られて其をまだく不足ぢやとおもはるゝの

か、嗚呼情無い、妾が云はずと知れてゐる汝自身おまへの身の程を、身の分際を忘れてか、と泣声になり搔口説く女房の頭は低く垂れて、鬚にさゝれし縫針の孔めどが啣くはへし一ひとすぢ条の糸ゆらくと振ふにも、千に碎くる心の態の知られていとゞ可憫いぢらしきに、眼を瞑ぎ居し十兵衛は、其時例の濁だみごゑ声出し、喧しいはお浪、黙つて居よ、我の話しの邪魔になる、親方様聞て下され。

其十五

思ひの中に激すればや、じたくと慄ふるひ出す膝の頭を緊しつか乎と寄せ合せて、其上もろてに両手突張り、身を固くして十兵衛は、情無い親

方様、二人で為うとは情無い、十兵衛に半分仕事を譲つて下され
 うとは御慈悲のやうで情無い、厭でござります、厭でござります、
 塔の建てたいは山 でも既もう十兵衛は断あきらめ念らめて居りまする、御上人
 様の御諭おさとしを聞いてからの帰り道すつぱり思ひあきらめました、
 身の程にも無い考を持つたが間違ひ、嗚呼私が馬鹿でござりまし
 た、のつそりは何処迄ものつそりで馬鹿にさへなつて居れば其で
 可い訳、溝板でもたゝいて一生を終りませう、親方様堪かに忍にして下
 され我が悪い、塔を建てうとは既もう申しませぬ、見ず知らずの他の
 人ではなし御恩になつた親方様の、一人で立派に建てらるゝを余よ
 所そながら視て喜びませう、と元氣無げに云ひ出づるを走り氣の源
 太悠ゆるりとは聴て居ず、ずいと身を進て、馬鹿を云へ十兵衛、余り

道理が分らな過ぎる、上人様の御諭は汝一人に聴けといふて為れ
 たではない我が耳にも入れられたは、汝の腹でも聞たらば我の胸
 で受取つた、汝一人に重石おもしを背負つて左様沈まれて仕舞ふては源
 太が男になれるかやい、詰らぬ思案に身を退て馬鹿にさへなつて
 居れば可いとは、分別が摯実くすみ過ぎて至当もつともとは云はれまいぞ、応
 左様ならば我が為ると得たり賢かしこで引受けては、上人様にも恥かし
 く第一源太が折角磨いた俠気をとこも其所で廃つて仕舞ふし、汝は固もつより
 虻蜂取らず、智慧の無いにも程のあるもの、そしては二人が何可
 からう、さあ其故に美しく二人で仕事を為うといふに、少しは氣
 まづいところが有つてもそれはお互ひ、汝が不足な程に此方にも
 面白くないのあるは知れきつた事なれば、双方忍耐がまんしあふ仕交として忍

耐の出来ぬ訳はない筈、何もわざ／＼骨を折つて汝が馬鹿になつて仕舞ひ、幾日の心配を煙と消しきや天晴な手腕うでを寝せ殺しにするにも当たらない、なう十兵衛、我の云ふのが腑に落ちたら思案をがらり翻然と仕変へて呉れ、源太は無理は云はぬつもりだ、これさ何故黙つて居る、不足か不承知か、承知しては呉れないか、ゑゝ我の了見をまだ呑み込んで呉れないか、十兵衛、あんまり情無いではないか、何とか云ふて呉れ、不承知か不承知か、ゑゝ情無い、黙つて居られては解らない、我の云ふのが不道理か、それとも不足で腹立てゝか、と義には強くて情には弱く意地も立つれば親切も飽くまで徹す江戸ツ子腹の、源太は柔和やさしく問ひかくなれば、聞居るお浪は嬉しさの骨身に浸みて、親方様あゝ有り難うござりますると

口には出さねど、舌よりも真実を語る涙をば溢らす眼に、返辞せぬ夫の方を氣遣ひて、見れば男は露一厘身動きなさず無言にて思案の頭重く低れ、ぽろりくと膝の上に散らす涙珠なみだの零おちて声あり。

源太も今は無言となり少しばらく時ひとり考へしが、十兵衛汝はまだ解らぬか、それとも不足とおもふのか、成程折角望んだことを二人でするは口惜かる、然も源太を心しんにして副になるのは口惜かる、ゑゝ負けてやれ斯様して遣らう、源太は副になつても可い汝を心に立てるほどに、さあゝ清く承知して二人で為うと合点せい、と己が望みは無理に折り、思ひきつてぞ云ひ放つ。とツとんでも無い親方様、仮令十兵衛氣が狂へばとて何して其様は出来ますも

のぞ、勿体ない、と周章て云ふに、左様なら我の異見につくか、
 と唯一言に返されて、其は、と窮るつまをまた追つ掛け、汝きさまを心に立
 てやうか乃至それでも不足か、と烈しく突かれて度を失ふ傍にて
 女房が気もわくせき、親方様の御異見に何故まあ早く付かれぬ、
 と責むるが如く恨みわび、言葉そゞろに勸むれば十兵衛つひに絶
 体絶命、下げたる頭しづかを徐しづかに上げ円つぶらの眼を剥き出して、一ツの仕事
 を二人でするは、よしや十兵衛心になつても副になつても、厭な
 りや何しても出来ませぬ、親方一人で御建なされ、私は馬鹿で終
 りまする、と皆まで云はせず源太は怒つて、これほど事を分けて
 云ふ我の親切なさけを無にしても歟。唯はい、ありがたうはござりまするが、
 虚言うそは申せず、厭なりや出来ませぬ。汝おのれよく云つた、源太の言葉

にどうでもつかぬ歟。是非ないことでござります。やあ覚えて居よ此のつそりめ、他の情ひとの分らぬ奴、其様の事云へた義理か、よしおのれく汝に口は利かぬ、一生溝とどでもいぢつて暮せ、五重塔は氣の毒ながら汝に指もさゝせまい、源太一人で立派に建てる、成らば手柄てんに批点でも打て。

其十六

ゑい、ありがたうござります、滅法界に酔ひました、もう飲いけやせぬ、と空辞誼そらしぎは五月蠅ほど仕ながら、猪口もつ手を後へは退かぬが可笑き上戸の常態つね、清吉既馳走酒に十分酔たれど遠慮ぶに三分

の真面目をとゞめて殊勝らしく坐り込み、親方の不在るすに斯様爛醉へび
 ては済みませぬ、姉御と対酌さしでは夕暮を躍るやうになつてもなり
 ませんからな、アハ、無暗に嬉しくなつて来ました、もう行きま
 せう、はめを外すと親方の御眼玉だ、だが然し姉御、内の親方に
 は眼玉を貰つても私は嬉しいとおもつて居ます、なにも姉御の前
 だからとて軽薄を云ふではありませんせぬが、真実ほんとに内の親方は茶袋
 よりもありがたいとおもつて居ます、日いつぞや外の凌雲院の仕事の時
 も鐵や慶むかうを対にして詰らぬことから喧嘩を初め、鐵が肩先へ大怪
 我をさした其後で鐵が親から泣き込まれ、嗚呼悪かつた氣の毒な
 ことをしたと後悔しても此方も貧的、何様どうしてやるにも遣り様な
 く、困りきつて逃かけおち亡とまで思つたところを、黙つて親方から療

治手当も為てやつて下された上、かけら半分叱言らしいことを私わつちに云はれず、たゞ物和しく、清や汝てめへ喧嘩は時のはづみで仕方は無
 いが気の毒とおもつたら謝罪あやまつて置け、鐵が親の氣持も好かろし
 汝てめへの寢覚も好といふものだど心付けて下すつた其時は、嗚呼何様
 して此様こんなに仁慈深なまげかると有難くて有難くて私は泣きました、鐵に
 謝罪る訳は無いが親方の一言に堪忍がまんして私も謝罪に行きましたが、
 それから異おつなもので何時となく鐵とは仲好になり、今では何方に
 でも万ひよつと一したことの有れば骨を拾つて遣らうか貰はうかといふ
 位の交際つきあひになつたも皆親方の御蔭、それに引變へ茶袋なんぞは
 無暗に叱言を云ふばかりで、やれ喧嘩をするな遊興あそびをするなど下
 らぬ事を小五月蠅く耳はたの傍で口説きます、ハ、ハ、いやはや話にな

つたものではありませんぬ、ゑ、茶袋とは母親おふくろの事です、なに酷くはありませぬ茶袋で沢山です、然も渋をひいた番茶の方です、あツハ、ゑ、ありがたうござります、もう行きませう、ゑ、また一本爛つけたから飲んで行けと仰るのですか、あゝありがたい、茶袋だと此方で一本といふところを反対あべこべにもう廃せと云ひますは、あゝ好い心持になりました、歌ひたくなりましたな、歌へるかとは情ない、松づくしなぞは彼奴に賞められたほどで、と罪の無いことを云へばお吉も笑ひを含むで、そろ／＼惚気は恐ろしい、などと調戯からかひ居るところへ帰つて来たりし源太、おゝ丁度よい清吉居たか、お吉飲まうぞ、支度させい、清吉今夜は酔ひ潰れる、胴魔声の松づくしでも聞てやろ。や、親方立聞して居られたな。

其十七

清吉酔ふては 《みづく》と、実の熟いつた丹波王母珠たんばほづぎほど紅
うして、罪も無き高笑ひやら相手もなしの空からりきみ示威、朋輩の誰の
樽彼の樽、自己おのれが仮こわいろ声の何所なんじよ其所で喝采やんやを獲たる自慢、奪あげられ
ぬ奪もだちられるの云ひ争ひの末何楼なにかの獅顔しかみ火鉢を盗り出さんとして朋
友の仙の野郎がおほしくじり大失策を仕た話、五十間で地廻りを擲つた事
など、縁に引かれ凶に乗つて其から其へと饒舌り散らす中、不凶
のつそりの樽に火が飛べば、とろりとなりし眼を急に見張つて、
ぐにやりとして居し肩を聳そばだて、冷たうなつた飲みかけの酒をかを異

しく唇まげながら吸ひ干し、一体あんな馬鹿野郎を親方の可愛が
 るといふが私わっちには頭てんから解りませぬ、仕事といへば馬鹿丁寧はこで扱
 びは一向つきはせず、柱一本鳴居しきゑ一ツで嘘をいへば鉋とを三度も礪
 ぐやうな緩慢のろまな奴、何を一ツ頼んでも間に合つた例ためしが無く、赤松
 の炉縁一ツに三日の手間を取るといふのは、多方あゝいふ手合だ
 らうと仙が笑つたも無理は有りませぬ、それを親方が鼻屑きんにした
 ので一時は正直のところ、済みませんが私も金きんも仙も六も、あんな
 まり親方の腹が大きすぎて其程でもないものを買ひ込み過ぎて居
 るでは無いか、念入りばかりで氣に入るなら我おれたち等も是から羽目
 板にも仕上げ鉋ひがみ、のろり〜と充したゝか分清めて碁盤肌つきあひにでも削らう
 かと僻味ひがみを云つた事もありました、第一彼奴は交際つきあひ知らずで女ぢ

よろかひ
郎買 一度一所にせず、好鬪鷄鍋つゝき合つた事も無い唐偏朴、

何時か大師へ一同が行く時も、まあ親方の身辺まはりについて居るもの

を一人ばかり仲間はずれにするでも無いと私が親切に誘つてやつ

たに、我おれは貧乏で行かれないと云つた切りの挨拶は、なんと愛想

も義理も知らな過ぎるではありませんか、銭が無ければ女房かゝの一

枚着を曲げ込んでも交際つきあひは交際で立てるが朋友ともだちづく、それも

解らない白痴たはけの癖に段 親方の恩を被て、私や金と同じことに今

では如何か一人立ち、然も憚りながら 青あをつばな 涕 垂らして弁当箱の

持運び、木片こつぱを担いでひよろ／＼帰る餓鬼の頃から親方の手につ

いて居た私や仙とは違つて奴は渡り者、次第を云へば私等より一

倍深く親方を有難い忝ないと思つて居なけりやならぬ筈、親方、

姉御、私は悲しくなつて来ました、私は若しもの事があれば親方や姉御のためと云や黒煙の煽りを食つても飛び込むぐらゐの了見は持つて居るに、畜生ツ、あゝ人情無なさはい野郎め、のつそりめ、彼奴は火の中へは恩を脊負つても入りきるまい、碌な根性は有つて居まい、あゝ人情無なさはい畜生めだ、と酔が凶らず云ひ出せし不平の中に潜り込んで、めそくめそく泣き出せば、お吉は夫の顔を見て、例いつもの癖が出て来たかと困つた風情は仕ながらも自己おのれの胸にものつそりの憎さがあれば、幾分いくぶんかは清が言葉を道理もつともと聞く傾きもあるなるべし。

源太は腹に戸締の無きほど愚魯おろかならざれば、猪口を擬さしつけ高笑ひし、何を云ひ出した清吉、寝惚るな我の前だは、三の切を出

しても初まらぬぞ、其手で女でも口説きやれ、随分ころりと来る
 であらう、汝が惚けた小蝶さまの御部屋では無い、アツハ、と
 戯言おどけを云へば尚真面目に、木ざゞだま 珠ほどの涙を払ふ其手をペたりと
 刺身皿の中につつこみ、しやくり上げ 歎しやくりあげ 歎して泣き出し、あゝ
 情無い親方、私を 酔よつぱらひ 漢 あしらひは情無い、酔つては居ませぬ、
 小蝶なんぞは飲ばませぬ、左様いへば彼奴の面が何所かのつそり
 に似て居るやうで口惜くて情無い、のつそりは憎い奴、親方の対むかう
 を張つて大それた、五重の塔を生意気にも建てやうなんとは憎い
 奴憎い奴、親方が和やさし過ぎるので増長した謀反人め、謀反人も明
 智のやうなは道もつとも 理だと伯龍が講釈しましたが彼奴のやうなは大
 悪無道、親方は何日のつそりの頭を鉄扇で打ちました、何日いつ蘭丸

にのつそりの領地をや与ると云ひました、私は今に若も彼奴が親方
 の言葉に甘へて名を列べて塔を建てれば打捨うつちやつては置けませぬ、
 擲たき殺して狗いぬに呉れます此様いふやうに擲き殺して、と明徳利の
 横面いきなり突然打き飛ばせば、碎片かけらは散つて皿小鉢跳り出すやちん鏘然からり
 馬鹿野郎め、と親方に大喝されて其儘にぐづりと坐り沈おとなし静く居
 るかと思へば、散かりし還原もどしのり海苔の上に額おしつけ既いびき軒声なり。
 源太はこれに打笑ひ、愛嬌のある阿呆めに搔卷かけて遣れ、と云
 ひつゝ手酌にぐいと引かけて酒気を吹くこと良久しく、怒つて帰
 つて来はしたものの、彼様あでは高が清吉同然、さて分別がまだ要る
 は。

其十八

源太が怒つて帰りし後、腕こまぬ拱こまぬきて茫然たる夫の顔をさし覗きて、吐息つく／＼お浪は歎じ、親方様は怒らする仕事は畢竟つまり手に入らず、夜の眼も合さず雛形まで製造こしらへた幾日の骨折も苦労も無益むだにした揚句の果ひとに他の氣持を悪うして、恩知らず人情無しと人の口端にかゝるのは余りといへば情無い、女の差出た事をいふと唯一口に云はるゝか知らねど、正直律義も程のあるもの、親方様が彼あれほど程に云ふて下さる異見について一緒に仕たとて恥辱はぢにはなるとまいに、偏かたいぢ僻張つて何の詰らぬ意気地立て、それを誰が感心なと褒ませう、親方様の御料簡につけば第一御恩ある親方の御心持

もよい訳、またお前の名も上り苦勞骨折の甲斐も立つ訳、三方四
 方みな好いに何故其氣にはならぬか、少しもお前の料簡が妾の
 腹には合のみこめ点ぬ、能くまあ思案仕直して親方様の御異見につい従
 ふては下されぬか、お前が分別さへ更かへれば妾が直にも親方様のと
 ころへ行き、何にか彼にか謝罪云ふて一生懸命精一杯、打たれて
 も擲かれても動くまい程覚悟をきめ、謝罪つて謝罪つて謝罪り貫ぬ
 いたら御情深い親方様が、まさかに何日まで怒つてばかりも居ら
 れまい、一時の料簡違ひは堪か忍にして下さる事もあらう、分別仕更
 て意地張らずに、親方様の云はれた通り仕て見る気にはならぬ
 か、と夫思ひの一筋に口説くも女の道もつとも理なれど、十兵衛はなほ
 眼も動かさず、あゝもう云ふてくれるな、あゝ、五重塔とも云ふ

てくれるな、よしない事を思ひたつて成程恩知らずとも云はれう
 人情なしとも云はれう、それも十兵衛の分別が足らいで出来した
 こと、今更何共是非が無い、然し汝の云ふやうに思案仕更るは何
 しても厭、十兵衛が仕事に手下は使はうが助言は頼むまい、人の
 仕事の手下になつて使はれはせうが助言はすまい、梶組も椽たるきわ配
 りも我が為る日には私の勝手、何所から何所まで一寸たりとも人
 の指揮さしづは決して受けぬ、善いも悪いも一人で脊負つて立つ、他の
 仕事に使はれ、ば唯正直の仲間取りとなつて渡されただけの事す
 るばかり、生意気な差出口は夢にもすまい、自分が主でも無い癖
 に自己おのが葉色を際立て、異かはつた風を誇ほこり顔がの寄生木やどりぎは十兵衛の虫
 が好かぬ、人の仕事に寄生木となるも厭なら我が仕事に寄生木を

容るゝも虫が嫌へば是非がない、和しい源太親方が義理人情を嘯
 み砕いて態 愆憑すゝめて下さるは我にも解つてありがたいが、なまじ
 ひ我の心を生して寄生木あしらひは情無い、十兵衛は馬鹿でもの
 つそりでもよい、寄生木になつて栄えるは嫌ぢや、矮小けちな下草したぐさ
 になつて枯れもせう大樹おほきを頼まば肥料こやしにもならうが、たゞ寄生木
 になつて高く止まる奴等を日頃いくらも見ては卑い奴めと心中で
 蔑視みさげて居たに、今我が自然親方の情に甘へて其になるのは如何
 あつても小恥しうてなりきれぬは、いつその事に親方の指揮のと
 ほり此を削れ彼あれを挽き割れと使はるゝなら嬉しけれど、なまじ情
 が却つて悲しい、汝も定めて解らぬ奴と恨みもせうが堪忍して呉
 れ、ゑゝ是非がない、解らぬところが十兵衛だ、此所がのつそり

だ、馬鹿だ、白痴漢たはけだ、何と云はれても仕方は無いは、あゝツ火も小くなつて寒うなつた、もうくゝ寝てでも仕舞はうよ、と聴けば一道理の述懐。お浪もかへす言葉なく無言となれば、尚寒きひとま一室を照せる行燈も灯花ちやうじに暗うなりにけり。

其十九

其夜は源太床に入りても中眠らず、一番鶏二番鶏を耳たしかに聞て朝も平日つねよりは夙はやう起き、含嗽うがひてうづ手水に見ぬ夢を洗つて熱茶一杯に酒の残り香を払ふ折しも、むくくゝと起き上つたる清吉ね寝惚眼ぼれめをこすりくゝ怪訝顔してまごつくに、お吉ともふ／＼き噴飯だし

て笑ひ、清吉昨夜は如何したか、と颯なぶれば急に危かしこ坐まつて無茶苦
 茶に頭を下げ、つい御馳走になり過ぎて何時か知らず寝て仕舞ひ
 ました、姉御、昨夜わつち私は何か悪いことでも為はしませぬか、と心
 配相に尋ぬるも可笑く、まあ何でも好いは、飯でも食つて仕事に
 行きやれ、と和やさしく云はれてますく、畏おそれ、恍然うつとりとして腕を組
 み頻りに考へ込む風情、正直なるが可愛らし。

清吉を出しやりたる後、源太は尚も考にひとり沈みて日頃の快さ
つぱり活とした調子に似もやらず、碌 お吉に口さへきかで思案に思
 案を凝らせしが、あゝ解つたと独り言するかと思へば、愍然ふびんなど
 溜息つき、ゑゝ抛なげやうかと云ふかとおもへば、何して呉れうと腹
 立つ様子を傍にてお吉の見る辛さ、問ひ慰めんと口を出せば黙つ

て居よとやりこめられ、詮方なさに胸の中にて空しく心をいたむるばかり。源太は其等に関ひもせず夕暮方まで考へ考へ、漸く思ひ定めやしけむ衝つと身を起して衣服をあらため、感応寺に行き上人に見えて昨夜の始終をば隠すことなく物語りし末、一旦は私もまみ余り解らぬ十兵衛の答に腹を立てしものゝ歸つてよくよく考ふれば、仮令ば私一人して立派に塔は建つるにせよ、それでは折角御諭しを受けた甲斐無く源太がまた我慾にばかり強いやうで男児をとこらしうも無い話し、といふて十兵衛は十兵衛の思わくを滅多に捨はずまじき様子、彼も全く自己おのれを押へて譲れば源太も自己を押へて彼に仕事をさせ下されと譲らねばならぬ義理人情、いろく愚昧おろかな考を使つて漸く案じ出したことにも十兵衛が乗らねば仕方なく、

それを怒つても恨むでも是非の無い訳、既はや此上には変つた分別も私には出ませぬ、唯願ふはお上人様、仮令ば十兵衛一人に仰せつけられますればとて私かならず何とも思ひますまいほどに、十兵衛になり私になり二人共 になり何様どうとも仰せつけられて下さりませ、御口づからの事なれば十兵衛も私も互に争ふ心は捨て居りまするほどに露さら故障はござりませぬ、我等二人の相談には余つて願ひにまゐりました、と実意を面に現しつゝ願へば上人ほくく笑はれ、左様ぢやろ左様ぢやろ、流石そなたに汝も見上げた男ぢや、好いく、其心掛一つで既う生雲塔見事に建てたより立派に汝はなつて居る、十兵衛も先刻さつきに来て同じ事を云ふて帰つたは、彼も可愛い男ではないか、のう源太、可愛がつて遣れ可愛がつて遣れ、

と心あり氣に云はるゝ言葉すを源太早くも合点して、ゑゝ可愛がつて遣りますとも、といと清すしげに答れば、上人満面皺しにして悦び玉ひつ、好いは好いは、嗚呼氣味のよい男児ぢやな、と真から底から褒ほ美められて、勿体なさはあるながら源太おもはず頭をあげ、お蔭で男児になれましたか、と一語に無限の感慨を含めて喜ぶ男泣き。既此時に十兵衛が仕事に助力せん心の、世に美しくも湧たるなるべし。

其二十

十兵衛感応寺にいたりて朗圓上人に見えまみ、涙ながらに辞退の旨

云ふて帰りし其日の味氣無き、煙草のむだけの氣も動かすに力無
く、茫然ぼんやりとしてつく／＼我が身の薄ふしあはせ命、浮世の渡りぐる
しき事など思ひ廻めぐらせば思ひ廻すほど嬉しからず、時刻になりて食
ふ飯の味が今更かは異れるではなけれど、箸持つ手さへ躊躇たゆたひ勝にて
舌が美味うまうは受けとらぬに、平常つねは六碗七碗を快くう喫くひしも僅に
一碗二碗で終へ、茶ばかり却つて多く飲むも、心に不悦まつぎの有る人
の免れ難き慣例ならひなり。

あるじ主人が浮かねば女房も、何の罪なき頑やんちや要やざかりの猪之まで自お
然のづと浮のしみき立たず、淋のしみしき貧家のいとゞ淋のぞみしく、希望も無ければ快た
樂のしみも一点あらで日を暮らし、暖味のない夢に物寂た夜を明かし
けるが、お浪あかつき暁天の鐘に眼覚めて猪之と一所に寐そつたる床より密

と出るも、朝風の寒いに火の無い中から起すまじ、も少し睡ねさせ
 て置かうとの慈やさしき親の心なるに、何も彼も知らいでたわい無く
 寐て居し平生いつもとは違ひ、如何せしことやら忽ち飛び起き、襦袢一
 つで夜具の上跳ね廻り跳ね廻り、厭ぢやい厭ぢやい、父様を打つ
 ちや厭ぢやい、と蕨わらびのやうな手を眼にあて、何かは知らず泣き出
 せば、ゑゝこれ猪之は何したもので、と吃驚しながら抱き止むる
 に抱かれながらも猶泣き止まず。誰も父様を打ちは仕ませぬ、夢
 でも見たか、それそこに父様はまだ寐て居らるゝ、と顔を押向け
 知らすれば不思議さうに覗き込で、漸く安心しは仕てもまだ疑うたが
 惑ひの晴れぬ様子。

猪之や何にも有りはし無いは、夢を見たのぢや、さあ寒いに風

邪をひいてはなりません、床に這入つて寐て居るがよい、と引き
 倒すやうにして横にならせ、搔卷かけて隙間無きやう上から押し
 つけ遣る母の顔を見ながら眼をぱつちり、あゝ怖かつた、今他所
 の怖い人が。おゝおゝ、如何か仕ましたか。大きな、大きな鉄
 槌で、黙つて坐つて居る父様の、頭を打つて幾度も打つて、頭
 が半分砕れたので坊は大変吃驚した。ゑゝ鶴亀、厭なこと、
 延喜でも無いことを云ふ、と眉を皺むる折も折、戸外を通る納豆
 売りの戦へ声に覚えある奴が、ちエツ忌、しい草鞋が切れた、と
 打独語うちつぶやきて行き過ぐるに女房ますゝ、気色あしを悪くし、台所に出
 て釜の下を焚きつくれば思ふ如く燃えざる薪まきも腹立しく、引窓の
 滑よく明かぬも今更のやうに焦れつたく、嗚呼何となく厭な日と

思ふも心からぞとは知りながら、猶氣になる事のみ気にすればにや多けれど、また云ひ出さば笑はれむと自分で呵つて平日よりは笑顔をつくり言葉にも活気をもたせ、澆 《いきく》として夫をあしらひ子をあしらへど、根が態とせし偽飾なれば却つて笑ひの尻声が憂愁の響きを遺して去る光景の悲しげなるところへ、十兵衛殿お宅か、と押柄に大人びた口きながら這入り来る小坊主、高慢にちよこんと上り込み、御用あるにつき直と来られべしと前後無しの棒口上。

お浪も不審、十兵衛も分らぬことに思へども辞みもならねば、既感応寺の門くゞるさへ無益しくは考へつゝも、何御用ぞと行つて問へば、天地顛倒こりや何ぢや、夢か現か真実か、圓道右に爲

右衛門左に朗圓上人まんなか中央まんなかに坐したまふて、圓道言葉おごそかに、
 此度建こんりふ立ふなるところの生雲塔の一切工事川越源太に任せられべ
 き筈のところ、方丈思しめし寄らるゝことあり格別の御詮議例外
 の御慈悲をもつて、十兵衛其方に確しかと御任せ相成る、辞退の儀は
 決して無用なり、早 ありがたく御受申せ、と云ひ渡さるゝそれ
 さへあるに、上人皺枯れたる御声にて、これ十兵衛よ、思ふ存分
 仕し遂とげて見い、好う仕上らば嬉しいぞよ、と荷担になふに余る冥加の御
 言葉。のつそりハツと俯伏せしまゝ五体を濤なみと動ゆるがして、十兵衛
 めが生命はさ、さ、さ、さし出しまする、と云ひし限りぎ喉塞のどふせがりて言
 語絶え、岑しんかん閑かんとせし広座敷に何をか語る呼吸の響き幽かすかにしてま
 た人の耳に徹しぬ。

其二十一

紅蓮白蓮の香ゆかしくにほひ衣袂たもとに裾すそに薰り来て、浮葉うきはに露つゆの玉たま動ゆぎ
 立葉たちばに風かぜの軟吹そよぶける面白おもしろの夏なつの眺望ながめは、赤蜻蛉あせな菱藻ひしもをなぶり初霜はつしも向
 ふが岡おかの樹梢こずゑを染めてより全然さつぜんと無なくなつたれど、赭あか色いろになり
 て荷はの茎はしばかり情無なさう立たてる間に、世よを忍しのび氣げの白鷺しらさぎが徐ゆる々々と
 ろり々と歩あむ姿すがたもをかしく、紺青色こんせいしよに暮くれれて行く天そらに漸しだく輝ひかり出で
 す星ほしを脊中せきちゆうに擦すつて飛とぶ雁かりの、鳴なき渡わたる音ねも趣おもむき味あじある不ふ忍しのの池いけ
 の景色けいしよを下物さかなの外ほかの下物したものにして、客きやくに酒さけをば亀かめの子こほど飲のまする
 蓬萊屋ほうらいやの裏うら二階にかいに、氣持きぢの好このささうな顔かほして欣然しんぜんと人ひとを待まちつ男おとこ一ひと

人。唐棧たうざん揃すまひの淡泊あつさりづくりに住吉張の銀煙管おとなしきは、
 職人らしき俠氣きほひの風の言語ものいひ拳動そぶりに見えながら毫末すこしも下卑げびぬ上品
 質だち、いづれ親方　と多くのものに立らるゝ棟梁株とは、予てか
 ら知り居る馴染のお傳といふ女が、嘸さぞお待ち遠でござりませう、
 と膳を置つゝ云ふ世辞を、待つ退屈つかまさに捕へて、待遠でく堪り
 きれぬ、ほんとに人の気も知らないで何をして居るであらう、と
 云へば、それでもお化粧しまひに手間の取れますが無理は無ない筈、と
 云ひさしてホゝと笑ふ慣れきつた返しの太刀筋。アハゝ、それも
 道理もつともぢや、今に來たらば能く見て呉れ、まあ恐らく此地こゝ地に類
 は無ならう、といふものだ。阿呀おや恐ろしい、何を散財おごつて下さりま
 す、而そして親方、といふものは御師匠さまですか。いゝや。娘さ

源太は笑ゑみを含みながら、さあ十兵衛此所へ来て呉れ、関ふことは無い大胡おほあぐら坐まで楽がに居ゐて呉れ、とおづ／＼し居ゐるを無理むりに坐まに居ゐる、頓やがて膳部ぜんぶも具備そなはりし後のち、さてあらためて飲のみ干かしたる酒盃しよばいとつて源太は擬さし、沈黙だんまりで居ゐる十兵衛じゆうべゑに對たいひ、十兵衛じゆうべゑ、先刻せんこくに富松とみまつを態たい遣つかつて此様このような所ところに來きて貰もらつたは、何でも無い、實じつは仲直なほなほり仕つかて貰もらひたくてだ、何か汝なんぢとわつさり飲のんで互たがひひの胸むねを和熟わじやくさせ、過こなひだ日の夜よの我われが云いふた彼かれ云いひ過こぎも忘わすれて貰もらひたいとおもふからの事こと、聞きて呉まれ斯ごとくいふ訳わけだ、過こ日の夜よは實じつは我われも余あまり汝なんぢを解とらぬ奴やつと一途いつとに思おもつて腹はらも立たつた、恥はしいが肝癩かんらんも起おし業わざも沸にやし汝なんぢの頭あたまを打碎ぶつかいて遣つかりたいほどにまでも思おもふたが、然しかし幸し福あはせに源太げんたの頭あたまが悪玉あくぎよにばかりは乗取のりとられず、清吉せいきちめが家いへへ來きて

酔つた揚句に云ひちらした無茶苦茶を、嗚呼了見の小さい奴は詰らぬ事を理屈らしく恥かしくも無く云ふものだ、聞て居るさへ可笑くて堪らなさに不図左様思つた其途端、其夜汝の家で陳ならべ立つて来た我の云ひ草に気が付いて見れば清吉が言葉と似たり寄つたり、ゑゝ間違つた一時の腹立に捲き込まれたか残念、源太男が廢すたる、意地が立たぬ、上人の蔑視さげすみも恐ろしい、十兵衛が何も彼も捨て辞退するものを斜はすに取つて逆意地たてれば大間違ひ、とは思つても余り汝の解らな過ぎるが腹立しく、四方八方何所から何所まで考へて、此所を推せば其所に襲がまんしくて忌しくて随分堪忍も仕かねたが、扱あつかいよく了見を定めて上人様の御眼にかゝり所存を申し上げて見れば、好いゝと仰せられた唯の一言に雲霧もやくは

既もう無くなつて、清すしい風が大空を吹いて居るやうな心持になつた
 は、昨日はまた上人様から熊の御招で、行つて見たれば我を御
 賞美の御言葉数 の其上、いよ／＼十兵衛に普請一切申しつけた
 が蔭になつて助けてやれ、皆そなた汝の善根福種になるのぢや、十兵衛
 が手には職人もあるまい、彼がいよ／＼取掛る日には何人いくらも備ふ
 其中に汝が手下の者も交らう、必ず猜忌そねみひがみ邪曲など起さぬやうに其
 等には汝から能く云ひ含めて遣るがよいとの細い御諭し、何から
 何まで見透しで御慈悲深い上人様のありがたさにつく／＼我折
 つて歸つて来たが、十兵衛、過こなひだ日の云ひ過こごしは堪忍して呉れ、
 斯様した我の心意気が解つて呉れたら従いままで来通り淨く睦つきあじく交際
 つて貰はう、一切が斯様定つて見れば何と思つた彼と思つたは皆

夢の中の物詮議、後に遺して面倒こそあれ益やく無いこと、此不忍の池水にさらりと流して我も忘れう、十兵衛汝も忘れて呉れ、木材きしなの引合ひ、鳶人足とびへの渡りなんど、まだ顔を売込んで居ぬ汝には一寸仕憎からうが、其等には我の顔も貸さうし手も貸さう、丸丁、山六、遠州屋、好い問屋は皆馴染で無うては先方さきが此方を呑んでならねば、万事齒痒い事の無いやう我を自由に出しに使へ、め組の頭の鋭次といふは短気なは汝も知つて居るであらうが、骨は黒くろろがね、鉄、性根玉は憚りながら火の玉だと平常ふだん云ふだけ、扱あじつくり頼めばぐつと引受け一寸退かぬ頼母しい男、塔は何より地行が大、事、空風火水の四ツを受ける地盤の固めを彼にさせれば、火の玉鋭次が根性だけでも不動が台座の岩より堅く基礎いしずえ確と据さする

と諸肌ぬいで仕て呉るゝは必定、彼あれにも頓て紹ひきあは介せう、既此様
 なつた暁には源太が望みは唯一ツ、天晴十兵衛汝が能く仕出来し
 さへすりや其で好のぢや、唯 塔さへ能く成できれば其に越した嬉し
 いことは無い、苟かりそめ且にも百年千年末世に残つて云はゞ我等おれたちの
 弟子筋の奴等が眼にも入るものに、へまがあつては悲しからうで
 はないか、情無いではなからうか、源太十兵衛時代には此様な下
 らぬ建物に泣たり笑つたり仕たさうなと云はれる日には、なあ十
 兵衛、二人が舍利しやりも魂たましひ魄も粉灰にされて消し飛ばさるゝは、拙へた
 な細工で世に出ぬは恥も却つて少ないが、遺したものを弟子め等
 に笑はる日には馬鹿親父が息子に異見さるゝと同じく、親に異見
 を食ふ子より何段増して恥かしかる、生磔いきばりつけ刑より死んだ後塩漬

の上磔刑になるやうな目にあつてはならぬ、初めは我も是程に深くも思ひ寄らなんだが、汝が我の対面むかうにたつた其意気張から、十兵衛に塔建てさせ見よ源太に劣りはすまいといふか、源太が建て、見せくれう何十兵衛に劣らうぞと、腹の底には木を鑽きつて出した火で観る先の先、我意は何も無くなつた唯だ好く成て呉れさへすれば汝も名譽ほまれ我も悦び、今日は是だけ云ひたいばかり、嗚呼十兵衛其大きな眼を湿ませて聴て呉れたか嬉しいやい、と磨いて礪といで礪ぎ出した純きつすぬ粹江戸ツ子粘り気無し、一びんで無ければ六と出る、忿怒いかりの裏の温和やさしさも飽まで強き源太が言葉に、身動じろぎさへせで聞き居し十兵衛、何も云はず畳に食ひつき、親方、堪忍して下され口がきけませぬ、十兵衛には口がきけませぬ、こ、こ、此通り、

あゝ有り難うござりまする、と愚魯おろかしくもまた真実まことに唯ひれふ平伏して泣き居たり。

其二十二

言葉は無くても真情まことは見ゆる十兵衛が挙動そぶりに源太は悦び、春風湖みづを渡つて霞日に蒸すともいふべき温和の景色を面にあらはし、尚もやさしき語気なだらか円暢えんちやうに、斯様打解けて仕舞ふた上は互まづいに不妙まづいことも無く、上人様の思召にも叶おれたちひ我等われたちの一分も皆立つといふもの、嗚呼何にせよ好い心持、十兵衛きさま汝も過してくれ、我も充分今日こそ酔はう、と云ひつゝ立つて違棚に載せて置たる風呂敷包

とりおろし、結び目といてふたつかね束にせし書類かきものいだし、十兵衛
 が前に置き、我にあつては要なき此品これの、一ツは面倒な材木きしなの委
はし細い当りを調べたのやら、人足軽子其他種さま／＼の入目を幾晩か
 かゝつて漸く調べあげた積り書、又一ツは彼所あそこを何して此所こゝを斯
 してと工夫に工夫した下絵図、腰屋根の地割だけなもあり、平地
 割だけなもあり、初重の仕形だけのもあり、二手先または三手
 先、出組だしくみばかりなるもあり、雲形波形唐草生類彫物しやうるゐほりもののみを
 書きしもあり、何より彼より面倒なる真柱から内法うちのりなげし長押腰長押
 切目長押に半長押、椽板椽かつら亀腹柱高欄垂木榑肘木ますひぢき、貫ぬきやら
すみぎ角木の割合算法、墨繩すみの引きやう規尺かねの取り様余さず洩さず記せ
 しもあり、中には我の為しならで家に秘めたる先祖の遺品かたみ、外へ

は出せぬ絵図もあり、京都きやうやら奈良の堂塔を写しとりたるものも
 あり、此等は悉みん皆汝に預くる、見たらば何かの足しにもなる、と
 自己おのが精神を籠めたるものを惜気もなしに譲りあたふる、胸の広
 さの頼母しきを解せぬといふにはあらざれど、のつそりもまた一
 気性、他の中着で我が口濡らすやうな事は好まず、親方まことに
 有り難うはござりまするが、御親切は頂戴いたいたも同然、これは其
 方に御納めを、と心は左程に無けれども言葉に膠にべの無さ過ぎる返
 辞をすれば、源太大きに悦ばず。此品これをば汝は要らぬと云ふのか、
 と慍いかりを底に匿して問ふに、のつそり左様とは気もつかねば、別段
 拝借いたしても、と一句迂濶うつかり答ふる途端、鋭き気性の源太は堪
 らず、親切の上親切を尽して我が智慧思案を凝らせし絵図まで与

らむといふものを、無下に返すか慮外なり、何程自己おのれが手腕の好
 て他の好情なまけを無にするか、そもく最初に汝おのれめが我が対岸へ廻は
 りし時にも腹は立ちしが、じつと堪へて争はず、普通なみたいてい大体のもの
 ならば我が庇蔭かげき被たる身をもつて一つ仕事に手を入るゝか、打擲
 いても飽かぬ奴と、怒つて怒つて何にも為べきを、可愛きものに
 おもへばこそ一言半句の厭味も云はず、唯 自然の成行に任せ置
 きしを忘れし歟、上人様の御諭しを受けての後も分別に分別渴ら
 してわざく出掛け、汝のために相談をかけてやりしも勝手の意
 地張り、大体たいていならぬものとても堪忍がまんなるべきところならぬを、
 よくく汝を最惜いとしいがればぞ踏み耐へたるとも知らざる歟、汝が運
 の好きのみにて汝が手腕の好きのみにて汝が心の正直のみにて、

上人様より今度の工事命しごとけられしと思ひ居る歟、此品をば与つて此源太が恩がましくでも思ふと思ふか、乃至は既慢もはや気の萌もして頭てんから何の詰らぬ者と人の絵図をも易く思ふか、取らぬとあるに強はせじ、余りといへば人情なき奴、あゝ有り難うござりますると喜び受けて此中の仕様をひとことふたこと一所二所は用ひし上に、彼箇所は御蔭うまで美うまう行きましたと後で挨拶するほどの事はあつても当然なるに、開けて見もせず覗きもせず、知れ切つたると云はぬばかりに愛想すげも菅すげもなく要らぬとは、汝十兵衛よくも撥ねたの、此源太が仕た図の中に汝の知つた者のみ有らうや、汝等うぬらが工風の輪の外に源太が跳り出ずに有らうか、見るに足らぬと其方で思はば汝が手筋も知れてある、大方高の知れた塔建たぬ前から眼うづに暎うづつて気の

毒ながら批難なんもある、既堪忍の緒も断れたり、卑劣きたない返報かへしは為ま
 いなれど源太が烈しい意趣返報は、為る時為さで置くべき歟、酸
 くなるほどに今までは口もきいたが既きかぬ、一旦思ひ捨つる上
 は口きくほどの未練も有たぬ、三年なりとも十年なりとも返報しかへしす
 るに充分な事のあるまで、物蔭から眼を光らして睨みつめ無言で
 じつと待つて、呉れうと、気性が違へば思はくも一二度終に三度
 めで無残至極に齟齬くひちがひ、いと物静に言葉を低めて、十兵衛殿、
 と殿の字を急につけ出し叮嚀に、要らぬといふ凶は仕舞ひましよ、
 汝一人で建つる塔定めて立派に出来やうが、地震か風の有らう時
 壊るゝことは有るまいな、と軽くは云へど深く嘲ける語ことばに十兵衛
 も快よからず、のつそりでも恥辱はぢは知つて居ります、と底力味あ

る楔くさびを打てば、中 見事な一言ぢや、忘れぬやうに記臆おぼえて居や
 うと、釘をさしつゝ恐ろしく睥みて後は物云はず、頓て忽ち立ち
 上つて、嗚呼飛んでも無い事を忘れた、十兵衛殿寛ゆるりと遊んで居
 て呉れ、我は帰らねばならぬこと思ひ出した、と風の如くに其座
 を去り、あれといふ間に推量勘定、幾金いくらか遺して風ふうと出つ、直其
 足で同じ町の某家あるが鬩あまたぐや否、厭いとだく、厭いとだく、詰らぬ
 下らぬ馬鹿 しい、愚凶 せずと酒もて来い、蠟燭いちづつ
 其が食へるか、鈍痴どちめ肴で酒が飲めるか、小兼春吉お房蝶子四の
 五の云はせず搦すねむで来い、臍すねの達者な若い衆頼も、我家うちへ行て清
 仙、鐵、政、誰でも彼でも直に遊びに遣よこすやう、といふ片手間
 にぐいぐい仰飲あふる間も無く入り来る女共に、今晚なぞとは手ぬる

いぞ、と驀まつかう向むかから焦躁しうれを吹つ掛けて、飲め、酒は車懸り、猪口ちよく
 は巴と廻せ廻せ、お房外見みえをするな、春婆大人ぶるな、ゑゝお蝶
 め其でも血が循環めぐつて居るのか頭上あたまに鼬花火いたち載せて火をつくるぞ、
 さあ歌へ、ぢやんくくと遣れ、小兼ね気持の好い声を出す、あぐ
 り踊るか、かぐりもつと跳ねろ、やあ清吉来たか鐵も来たか、何
 でも好い滅茶めいちゃに騒げ、我に嬉しい事が有るのだ、無礼講むれいこうに遣
 れく、と大将無法の元氣なれば、後れて来たる仙も政も煙けぶに巻
 かれて浮かれたち、天井抜けうが根太抜けうが抜けたら此方の御
 手のものと、飛ぶやら舞ふやら唸るやら、潮来出島いたこでしまもしほらしか
 らず、甚句とぎに鬨とぎの声を湧かし、かつぽれに滑つて転倒ころび、手品てづまの
 太鼓を杯洗で鐵がたゞけば、清吉はお房が傍に寝転んで銀釵かんざしに

お前そのよ其様に酔ばかり飲んでを稽古する馬鹿騒ぎの中で、一了簡あり顔の政が木遣を丸めたやうな声しながら、北に峨たる青山をおっと異なることを吐き出す勝手三昧、やつちやもつちやの末は拳も下卑て、乳房ちよの脹れた奴が臍の下に紙幕張るほどになれば、さあもう此処は切り上げてと源太が一言、それから先は何所へやら。

其二十三

蒼長じて、既何処にか風吹きたりし位に自然軽う取り做し、頓ては頓と打ち忘れ、唯仕事にのみ掛りしは愚おろかなるだけ情に鈍くて、一条道より外へは駈けぬ老おいうし牛の痴に似たりけり。

金箔銀箔瑠璃真珠すゐしやう 水精すゐしやう 以上合せて五宝、丁子ちやうじ沈香ぢんかう白はくき

膠やう薰陸くんろく白檀びやくだん 以上合せて五香、其他五藥五穀まで備へて大お

ほつちみおやのかみはにやまひこのかみはにやまひめのかみ

土祖神つちのすけ 埴山はにやま 彦神ひこ 埴山はにやま 媛神ひめ あらゆる鎮護の神 を祭

る地鎮の式もすみ、地曳土取故障なく、さて竜いしずゑ伏ふは其月の生氣

の方より右旋みぎめぐるりに次第据ゑ行き五星を祭り、新初めの大札には

鍛冶の道をば創められし天あまの目一箇の命、番匠の道關ひらかれし手置ておき

帆負ほおひの命彦狭知みこぢの命より思おもひ兼かねの命天兒屋根あまつこやねの命太玉あまつこやねの命、木

の神といふ句 廼くのち馳ちの神まで七神祭りて、其次の清匏の礼も首

尾よく濟み、とうぼうたいとらだちごくてんわう 東方提頭とうほうたいとらだち頼たのむ 持國天王ぢこくてんわう、さいはうびろしやくわうもくてんわ 西方尾嚙さいはうびろしやく又廣目天くわくもく

王わう、なんぼうびるろしやぞうちやうてん 南方毘留勒なんぼうびるろしやぞうちやうてん又增長天くわんじやう、ほつぼうびしやもんたもんでんわう 北方毘沙門ほつぼうびしやもんたもんでんわう多聞天王たもんたもんでんわう、四天

にかたどる四方の柱千年万年動ゆるぐなど祈り定むる柱立はしらだて式てんせ、天

いしきせいいたぐわん
 星色星多願の玉女三神、貪狼巨門等北斗の七星を祭りて
 願ふ永久安護、順に柱のかりくさび 仮轄を三ツづゝ打つて脇わきつかさ 司つかさに打
 ち緊めさする十兵衛は、幾干いくその苦心も此所まで運べば垢穢きたなきかほ 顔に
 も光の出るほど喜よろこび悦よろこびに氣の勇み立ち、動きなしもつき下津盤根いはねの太柱
 と式にて唱ふる古歌さへも、何とはなしにつく／＼嬉しく、身
 を立つる世のためしぞと其下しもの句を吟ずるにも莞爾にこくしつゝ、二ふた一度
 し、壇に向ふて礼拜つつし恭つつしみ、拍手の音清く響かし一切成就の祓を終
 る此所の光景さまには引きかへて、源太が家の物淋しさ。

主人は男の心強く思ひを外には現さねど、お吉は何程さばけた
 りとて流石女の胸小さく、出入るものに感応寺の塔の地曳の今日
 済みたり柱はしら立だて式昨日済みしと聞く度ごとに忌敷、嫉妬ほむらの火炎

衝き上がりて、汝十兵衛恩知らずめ、良人うちの心の広いのをよい事
 にして付上り、うまく名を揚げ身を立るか、よし名の揚り身の
 立たば差詰礼にも来べき筈を、知らぬ顔して鼻高 と其日 を
 送りくさる歟、余りに性質ひとの好過ぎたる良人うちも良人なら面憎きの
 つそりめもまたのつそりめと、折にふれては八重縦横に癩癩の虫
 跳ね廻らし、自己おのが小鬢の後毛上げて、ゑゝ焦つたいと罪の無
 き髪を掻きむしり、一文貰ひに乞食が来ても甲張り声に酷く謝絶
 りなどしけるが、或日源太が不在るすのところへ心易き医者道益とい
 ふ饒舌坊主遊びに來りて、四方よもやま八方の話の末、或人に連れられて
 過このあひだ般蓬萊屋へまゐりましたが、お傳といふ女からききました
 一分始終、いやどうも此方の棟梁は違つたもの、えらいもの、男

児は左様あり度と感服いたしました、と御世辞半分何の気なしに云ひ出でし詞を、手繰つて其夜の仔細をきけば、知らずに居てさへ口惜しきに知つては重　憎き十兵衛、お吉いよく腹を立ちぬ。

其二十四

清吉そなた汝は腑甲斐無い、意地も察しも無い男、何故私には打明けこなひだて過般こなひだの夜の始末をば今まで話して呉れ無かつた、私に聞かして氣の毒おつと異おつに遠慮をしたものか、余りといへば狭隘けちな根性、よしや仔細を聴たとしてまさか私が狼うろたへ狽うろたへまはり動転するやうなことはせぬに、女と輕しめて何事も知らせずうちのに置き隠し立して置く良

人ひとの了簡は兎も角も、汝そなたたち等らまで私を聾に盲目にして済して
 居るとは余りな仕打、また親方の腹の中がみすく、知れて居なが
 らに平氣の平左で酒に浮かれ、女郎買の供するばかりが男の能で
 もあるまいに、長閑のんき氣で斯して遊びに来るとは、清吉おまへ汝もおめで
 たいの、平生いつもは不在るすでも飲ませるところだが今日は私は関へない、
 海苔一枚焼いて遣るも厭なら下らぬ世間咄しの相手するも虫が嫌
 ふ、飲みたくば勝手に台所へ行つて呑口ひねりや、談話が仕たく
 ば猫でも相手に為るがよい、と何も知らぬ清吉、道益が帰りし跡
 へ偶然ふと行き合はせて散にお吉が不機嫌を浴せかけられ、訳も了
 らず驚きあきれて、へどもどなしつゝ段と様子を問へば、自己おのれ
 も知らずに今の今まで居し事なれど、聞けば成程何あつても堪忍がまん

の成らぬのつそりの憎さ、生命と頼む我が親方に重 恩を被た身をもつて無遠慮過ぎた十兵衛めが処置振り、飽まで親切真実の親方の顔踏みつけたる憎さも憎し何して呉れう。

ム、親方と十兵衛とは相撲にならぬ身分の差ちがひ、のつそり相手に争つては夜光の璧たまを小礫いしころに擲ぶつ付けるやうなものなれば、腹は十分立たれても分別強く堪へて堪へて、誰にも彼にも鬱憤を洩さず知らさず居らるゝなるべし、ゑゝ親方は情無い、他の奴は兎も角清吉だけには知らしても可さそうなものを、親方と十兵衛では此方が損、我とのつそりなら損は無い、よし、十兵衛め、たゞ置かうやと逸はやりきつたる鼻先思案。姉御、知らぬ中は是非が無い、堪忍して下され、様子知つては憚りながら既叱られては居ります

まい、此清吉が女郎買の供するばかりを能の野郎か野郎で無いか見て居て下され、左様ならば、と後しりごと声烈しく云ひ捨て格子戸がらり明つ放し、草履も穿かず後も見ず風より疾く駆け去れば、お吉今さら氣遣はしくつゞいて追掛け呼びとむる二声三声、四声めには既はや影さへも見えずなつたり。

其二十五

材きを斫はつる斧よきの音、板削る鉋こつばの音、孔を鑿ほるやら釘打つやら丁かちく響おがくづ忙しく、木片は飛んで疾風に木の葉の飜あへるが如く、鋸屑舞つて晴天に雪の降る感応寺境内普請場の景ありさま況賑やかに、

紺の腹掛頸筋に喰ひ込むやうなを懸けて小胯の切り上がった股引
いなせに、つつかけ草履の勇み姿、さも怜悧氣に働くもあり、汚
れ手拭肩にして日当りの好き場所に蹲踞み、悠然と鑿をと研ぐ衣な
服の垢穢きたなき爺もあり、道具搜しにまごつく小童わっぱ、頻りに木を挽割ひく
日傭取り、人さま／＼の骨折り氣遣ひ、汗かき息張る其中に、
総棟梁ののつそり十兵衛、皆の仕事を監督みまはりかた／＼、墨壺墨
さし矩尺かねもつて胸三寸にある切組を実物にする指図命令いひつけ。斯様截かうき
れ彼様あゝほ穿れ、此処を何様して何様やつて其処に是だけ勾配有たせ
よ、孕みが何寸凹みは何分と口でも知らせ墨繩なはでも云はせ、面倒
なるは板片に矩尺の仕様を書いても示し、鵜の目鷹の目油断無く
必死となりて自ら励み、今しも一人の若わかもの伎のに彫物の画を描き与

らんと余念も無しに居しところへ、野猪いのししよりも尚疾く塵土ほこりを蹴立て、飛び来し清吉。

忿怒の面火玉の如くし逆釣つたる目を一段視開き、畜生、のつそり、くたばれ、と大喝すれば十兵衛驚き、振り向く途端に驀まっか向うより岩も裂けよと打下すは、ぎらくするまで 怒る清吉、

忽ち勃然むっくと起きんとする襟元把とつて、やい我おれだは、血迷ふな此馬鹿め、と何の苦も無く斬もぎ取り捨てながら上からぬつと出す顔は、八方睨みの大おほまなこ眼、一文字口怒り鼻、渦卷縮れの両鬢は不動を欺くばかりの相形。

やあ火の玉の親分か、訳がある、打捨て置いて呉れ、と力を限り払ひ除けむと躡もがき焦燥あせるを、栄螺さつえの如き拳固で鎮圧しづめ、ゑゝ、

じたばたすれば拳殺はりころすぞ、馬鹿め。親分、情無い、此所を此所
 を放して呉れ。馬鹿め。ゑゝ分らねへ、親分、彼奴を活しては置
 かれねへのだ。馬鹿野郎め、べそをかくのか、従順く仕なければ
 尚まだ打つぞ。親分酷い。馬鹿め、やかましいは、拳殺すぞ。あんま
 り分らねへ、親分。馬鹿め、それ打つぞ。親分。馬鹿め。放して。
 馬鹿め。親分。馬鹿め。放して。馬鹿め。親。馬鹿め。放はな。馬鹿
 め。お。馬鹿め馬鹿めくくく、醜態ざまを見ろ、従順くなつたらう、
 野郎我が家へ来い、やい何様した、野郎、やあ此奴は死んだな、
 詰らなく弱い奴だな、やあい、誰奴どいつか来い、肝心の時は逃げ出し
 て今頃十兵衛が周圍に蟻のやうに群たかつて何の役に立つ、馬鹿ども、
 此方には亡者が出来かゝつて居るのだ、鈍遅どちめ、水でも汲んで来

て打注^{ぶつか}けて遣れい、落ちた耳を拾つて居る奴があるものか、白痴め、汲んで来たか、関ふことは無い、一時に手桶の水不^{みんな}残面へ打^ぶつけ付^{つけ}ろ、此様野郎は脆く生るものだ、それ占めた、清吉ツ、確^{しつかり}乎しろ、意地の無へ、どれく此奴は我が背負つて行つて遣らう、十兵衛が肩の疵は浅からうな、むゝ、よし、馬鹿ども左様なら。

其二十六

源太居るかと思入り来る鋭次を、お吉立ち上つて、おゝ親分さま、まあく此方へと誘へば、ずつと通つて火鉢の前に無遠慮の

大胡坐かき、汲んで出さるゝ桜湯を半分ばかり飲み干してお吉の顔を視、面色いろが悪いが何様かした歟、源太は何所ぞへ行つたの歟、定めし既聴もうたであらうが清吉めが詰らぬ事を仕出来しての、それ故一寸話があつて来たが、むゝ左様か、既十兵衛がところへ行つたと、ハ、ハ、ハ、敏捷すばやいゝ、流石に源太だは、我の思案より先に身体とつくが疾とつくに動いて居るなぞは頼母しい、なあにお吉心配する事は無い、十兵衛と御上人様に源太が謝罪わびをしてな、自分の示しが足らなかつたで手下ての奴が飛だ心得違ひを仕ました、幾重にも勘弁して下されと三ツ四ツ頭を下げれば済んで仕舞ふ事だは、案じ過しはいらぬもの、其でも先方さきが愚図　いへば正面まともに源太が喧嘩を買つて破裂ばれの始末をつければ可いさ、薄　聴いた噂では十兵衛

も耳朶の一ツや半分斫きり奪られても恨まれぬ筈、随分清吉の軽おつち躁よこちよい行為も一寸をかしな可い洒落か知れぬ、ハ、ハ、然かはいそし憫然そに我の拳固を大分食つて咩 《うんく》苦しがつて居るばかりか、十兵衛を殺した後は何様始末が着くと我に云はれて漸く悟つたかして、噫悪かつた、逸り過ぎた間違つた事をした、親方に頭を下げさするやうな事をした歟噫あゝ濟まない、自分の身体みうちの痛いのより後悔にぼろく涙をこぼ翻こぼして居る愍然ふびんさは、何と可愛い奴では無い歟、喃お吉、源太は酷く清吉を叱つて叱つて十兵衛が所へ謝あやまり罪に行けとまで云ふか知らぬが、其は表向の義理なりや是非は無いが、此所は汝おまへの儲け役、彼奴を何か、なあそれ、よしか、其所は源太を抱寝するほどのお吉様にわか了らぬことは無い寸法か、

アハ、ハ、ハ、源太が居ないで話も要らぬ、どれ帰らうかい御馳走
 は預けて置かう、用があつたら何日でもお出、とぼつ／＼語つて
 帰りし後、思へば済まぬことばかり。女の浅き心から分別も無く
 清吉に毒づきしが、逸りきつたる若き男の間違仕出して可憫あはれや清
 吉は自己おのれの世を狭め、わが身は大切だいじの所天をつとをまで憎うてならぬの
 つそりに謝罪らするやうなり行きしは、時の拍子の出来事ながら
 畢竟つまりは我が口より出し過あやまち失、兎せん角せん何とすべきと、火鉢
 の縁もたに凭する肘のついがつくりと滑るまで、我を忘れて思案に思
 案凝らせしが、思ひ定めて、応左様ぢやと、立つて箆笥の大抽匣、
 明けて麝じゃかう香の気かと共に投げ出し取り出すたしなみの、帯はそも
 〳〵此家こゝへ来し嬉し恥かし恐ろしの其時締めし、ゑ、それよ。懇ね

話^だつて買つて貰ふたる博多に繻子に未練も無し、三枚重ねに忍ば
 る、往^{むか}時は罪の無い夢なり、今は苦勞の山繭^{やままゆじま}縞、ひらりと飛ば
 す飛八丈此頃好みし毛^け万筋、千筋百筋氣は乱るとも夫おもふは
 唯一筋、唯一筋の唐^{から}七糸帶^{しゆつちん}は、お屋敷奉公せし叔母^{かたみ}が紀念と大
 切に秘藏^{ひめ}たれど何か厭はむ手放すを、と何やら彼やら有たけ出し
 て婢^{をんな}に包ませ、夫の歸らぬ其中と櫛笄^{かうがい}も手ばしこく小箱に纏めて、
 さて其品^{それ}を無残や余所の蔵に籠らせ、幾干かの金懷中に淺黄の頭
 巾小提灯、闇夜も恐れず鋭次が家に。

其二十七

池の端の行き違ひよりからり翻然と変りし源太が腹の底、初めは可愛
う思ひしも今は小癩に障つてならぬ其十兵衛に、頭を下げ両手を
ついて謝罪らねばならぬ忌しき。さりとして打捨置かば清吉の乱
暴も我が命令けて為せし歟のやう疑がはれて、何も知らぬ身に心
地快からぬ濡衣被せられむ事の口惜しく、唯さへおもしろからぬ
此頃余計な魔がさして下らぬ心づか勞ひを、馬鹿しき清吉めがふ拳
るまひ動のために為ねばならぬ苦しきに益心平おだやか穩ならねど、さ処
ば弁く道の処弁かで済むべき訳も無ければ、是も皆自然に湧きし事、
何とも是非なしと諦めて厭ながら十兵衛が家音おとつ問れ、不慮の難
をば訪ひ慰め、且は清吉を戒むること足らざりしを謝び、のつそ
り夫婦が様子を視るに十兵衛は例の無言三昧、お浪は女の物やさ

しく、幸ひ傷も肩のは浅く大した事ではござりませねば何卒^{どうぞ}お案じ下されますな、態 御見舞下されては実に恐れ入りまする、と如才なく口はきけど言葉遣ひのあらたまりて、自然^{おのづ}と何処かに稜^か角^どあるは問はずと知れし胸の中、若しや源太が清吉に内 含めて為せし歟と疑ひ居るに極つたり。

ゑゝ業腹な、十兵衛も大方我を左様視て居るべし、疾時機^{とくとき}の来よ此源太が返報^{しかへし}仕様を見せて呉れむ、清吉ごとき卑劣^{けち}な野郎の爲た事に何似るべき歟、斬^{てうな}で片耳殺ぎ取る如き下らぬ事を我が爲うや、我が腹立は木片の火のぱつと燃え立ち直消ゆる、堪へも意地も無きやうなる事では済まさじ承知せじ、今日の変事は今日の変事、我が癩癩は我が癩癩、全で別なり 関^{かゝりあひ}係なし、源太が為や

うは知るとき知れ悟らす時悟らせ呉れむと、裏うちにいよ／＼不平
 は懐けど露塵ほども外には出さず、義理の挨拶見事に済まして直
 其足を感じ寺に向け、上人の御目通り願ひ、一応自己が隸属みうちの者
 の不埒を御謝罪おわびし、我家に歸りて、卒いざこれよりは鋭次に会ひ、其
 時清を押へ呉たる礼をも演べつ其時の景状やうすをも聞きつ、又一ツに
 は散 清を罵り叱つて以後こののち我家に出入り無用と云ひつけ呉れむ
 と立出掛け、お吉の居ぬを不審して何所へと問へば、何方ちへか一
よと寸行て来るとしてお出になりました、と何食はぬ顔をんなで婢の答へ、口
ちどめ禁されてなりとは知らねば、応左様歟、よし／＼、我は火の玉
あにきの兄がところへ遊びに行たとお吉歸らば云ふて置け、と草履つつ
 かけ出合ひがしら、胡麻竹の杖とぼ／＼と焼痕やけこげのある提灯片手、

老の歩みの見る目笑止にへの字なりして此方へ来る婆。おゝ清の
 母おふくろ親ではないか。あ、親方様でしたか、

其二十八

あゝ好いところで御眼にかゝりましたが何所どちらへか御出掛けでござりまするか、と忙し気に老婆ばばが問ふに源太軽く会釈して、まあ能いは、遠慮せずと此方へ這入りやれ、態 夜道を拾ふて来たは何ぞ急の用か、聴いてあげやう、と立戻れば、ハイく、有り難うござります、御出掛のところを済みません、御免下さいまし、ハイく、と云ひながら後に随いて格子戸くゞり、寒かつたらう

に能う出て来たの、生憎お吉も居ないで関ふことも出来ぬが、縮ちぢこまつて居ずとずつと前へ進でて火にでもあたるがよい、と親切に云ふてくる、源太が言葉に愈身を堅くして縮まり、お構ひ下さいましては恐れ入りまする、ハイ、懐炉を入れて居りますれば是で恰好でござりまする、と意久地なく落かゝる水涕を洲の立つた半天の袖で拭きながら遙はるか下つて入口近きところに蹲とまり、何やら云ひ出したさうな素振り、源太早くも大方察として老婆の心の中嘸かしと気の毒さ堪らず、余計な事仕出して我に肝煎とらせし清吉のお先走りを罵り懲らして、当分出入ならぬ由云ひに鋭次がころへ行かんとせし矢先であれど、視れば我が子を除いては阿彌陀様より他に親しい者も無かるべき孱弱かよわき婆のあはれにて、我清吉

を突き放さば身は腰弱弓の弦つるに断れられし心地して、在るに甲斐なき生命ながらへむに張りも無くも無くなり、何程か悲み歎いて多くもあらぬ余生を愚痴の涙の時雨に暮らし、晴とした気持のする日も無くて終ることならむと、思ひ遣れば思ひ遣るだけ憫びん然さの増し、煙草捻つてつい居るに、婆は少しくにぢり出で、夜分まゐりまして実に済みませんが、あの少しお願ひ申したい訳のござりまして、ハイく、既御存知でもござりませうが彼清吉めが飛んだ事をいたしましたさうで、ハイく、鐵五郎様から大概は聞きました、平常からして気の逸い奴で、直に打つの斫きのと騒ぎまして其度にひやくさせます、お蔭さまで一人前にはなつて居りまして未だ兒童がきのやうな真まいつこく一酷、悪いことや曲つ

たことは決して仕ませぬが取り上せては分別の無くなる困つた奴やつこ
 で、ハイく、悪気は夢さら無い奴でござります、ハイく其は
 御存知で、ハイ有り難うござります、何様いふ筋で喧嘩をいたし
 ましたか知りませぬが大それた手斧てうななんぞを振り舞はしましたそ
 うで、左様きゝました時は私が手斧で斫られたやうな心持がいた
 しました、め組の親分とやらが幸ひ抱き留めて下されましたとか、
 まあ責めてもでござります、相手が死にでもしましたら彼奴あれめは下
 手人、わたくしは彼を亡くして生きて居る瀬はござりませぬ、ハ
 イ有り難うござります、彼めが幼ちひさい少いときは烈ひどい虫持むしもちで苦勞を
 させられましたも大抵ではござりませぬ、漸く中山の鬼子母神様
 の御利益で満足には育ちましたが、癒なりましたら七歳なまでに御庭

の土を踏ませませうと申して置きながら、遂何彼にかまけて御礼
参りもいたさせなかつた其御罰か、丈夫にはなりましたが彼通の
無鉄砲、毎 お世話をかけます、今日も今日とて鐵五郎様がこ
れくと搔摘んで話されました時の私の吃驚、刃物を準備よういまでし
てと聞いた時には、ゑゑ又かと思はずどつきり胸も裂けさうにな
りました、め組の親分様とかが預かつて下されたとあれば安心の
やうなもの、清めは怪我はいたしませぬかと聞けば鐵様の曖昧
な返辞、別条はない案じるなど云はるゝだけに猶案ぜられ、其親
分の家を尋ねれば、其処へ汝おまへが行つたが好いか行かぬが可いか我
には分らぬ、兎も角も親方様のところへ伺つて見ると云ひつ放し
で歸つて仕舞はれ、猶 胸がしくしく痛んで居ても起ても居られ

ませねば、留守を隣家となりの傘張りに頼むでやうやく参りました、何うかめ組の親分とやらの家を教へて下さいまし、ハイ／＼直にまゐりまするつもりで、何んな態して居りまするか、若しや却つて大怪我など為て居るのではござりますまいか、よいものならば早う逢て安堵したうござりまするし喧嘩の模様も聞きたうござりまする、大丈夫曲つた事はよもやいたすまいと思ふて居りまするが若い者の事、ひよつと筋の違つた意趣でゞも為た訳なら、相手の十兵衛様に先此婆が一生懸命で謝罪り、婆は仮令如何されても惜くない老おいほれ、生先の長い彼奴あれめが人様に恨まれるやうなことの無いやうに為ねばなりません、とおろ／＼涙になつての話し。始終を知らで一筋に我子をおもふ老の繰言、此返答には源太こまりぬ。

其二十九

八五郎其所に居るか、誰か来たやうだ明けてやれ、と云はれて、なんだ不思議な、女らしいぞと口の中で独語つぶやきながら、誰だ女嫌ひの親分の所へ今頃来るのは、さあ這入りな、とがらりと戸を引き退くれば、八ツ様はさんお世話、と軽い挨拶、提灯吹き滅けして頭巾を脱ぎにかゝるは、此盆にも此の正月にも心付して呉れたお吉と気がついて八五郎めんくらひ、素肌一枚どてらの袷まへ広がつて鼠色ねずみになりし犢鼻ふんどし禪の見ゆるを急に押し隠しなどしつ、親分、なんの、あの、なんの姉御だ、と忙しく奥へ声をかくるに、なんの尽しで

分る江戸ツ児。応左様か、お吉来たの、能く来た、まあ其辺そこらの塵ご埃みの無さうなところへ坐つて呉れ、油虫が這つて行くから用心
 しな、野郎ばかりの家は不潔きたないのが粧飾みえだから仕方が無い、我もおれ
おまへ汝のやうな好い鼻でも持つたら清潔きれいに為やうよ、アハ、と笑へ
 ばお吉も笑ひながら、左様したらまた不潔　と巖きびしく敷御叱おいぢめな
 ざるか知れぬ、と互ひに二ツ三ツ冗話むだばなし仕て後、お吉少しく改
 まり、清吉は眠ねて居りまするか、何様いふ様子か見ても遣りたし、
 心にかゝれば参りました、と云へば鋭次も打領き、清は今がたす
 やくね睡着ついて起きさうにも無い容態ぢやが、疵かさといふて別にあ
 るでもなし頭の顱骨さらを打破つた訳でもなければ、整骨ほねつぎいしや医師いしやの先
 刻云ふには、烈ひどく逆上したところを滅茶　に撲たれたため一時

は氣絶までも為たれ、保証うけあひ大したことは無い由、見たくば一寸
 覗いて見よ、と先に立つて導く後につき行くお吉、三疊ばかりの
 部屋の中に一切夢で眠り居る清吉を見るに、顔も頭も膨れ上りて、
 此様に撲つてなしたる鋭次の酷むごさが恨めしきまで可憫あはれなる態さまなれ
 ど、済んだ事の是非も無く、座に戻つて鋭次に対し、我夫うちでは必
 ず清吉が余計な手出しに腹を立ち、御上人様やら十兵衛への義理
 をかねて酷く叱るか出入りを禁とむるか何とかするでござりませう
 が、元はといへば清吉が自分の意恨で仕たではなし、畢竟つまりは此方
 の事のため、筋の違つた腹立をついむらくとしたのみなれば、
 妾めかけは何も我夫うちのするばかりを見て居る訳には行かず、殊更少し訳
 あつて妾めかけが何とか為てやらねば此胸の済まぬ仕誼しぎもあり、それや

これやを種 《いろく》と案じた末に浮んだは一年か半年ほど
 清吉に此地こち退かすること、人の噂も遠のいて我夫の機嫌も治つた
 ら取成し様は幾干も有り、まづそれまでは上方あたりに遊んで居
 るやう為てやりたく、路用の金も調こしらへて来ましたれば少しなれど
 も御預け申しまする、何卒宜敷云ひ含めて清吉めに与つて下さり
 ませ、我夫は彼通り表裏の無い人、腹の底には如何思つても必ず
 辛く清吉に一旦あたるに違ひ無く、未練気なしに叱りませうが、
 其時何と清吉が仮令云ふても取り上げぬは知れたこと、傍から妾
 が口を出しても義理は義理なりや仕様は無し、さりとして慾しで出
 来かした咎でもないに男一人の寄り付く島も無いやうにして知らぬ
 顔では如何しても妾が居られませぬ、彼あれが一人の母のことは彼さ

へ居ねば我夫にも話して扶助たすくるに厭は云はせまじく、また厭といふやうな分らぬことを云ひも仕ますまいなれば掛念はなけれど、妾が今夜来たことやら蔭で清をば働はたらくことは、我夫へは当分秘ないし密よにして。解つた、えらい、もう用は無からう、お帰りく、源太が大抵来るかも知れぬ、撞でつく見しては拙からう、と愛想は無けれど真実はある言葉に、お吉嬉しく頼み置きて帰れば、其後へ引きちがへて来る源太、果して清吉に、出入りを禁とむる師弟の縁断るとの言ひ渡し。鋭次は笑つて黙り、清吉は泣いて詫いぬびしが、其夜源太の帰りし跡、清吉鋭次にまた泣かせられて、狗いぬになつても我や姉御夫婦の門辺は去らぬと唸りける。

四五日過ぎて清吉は八五郎に送られ、箱根の温泉いでゆを志して江戸

を出しが、夫よりたどる東海道いたるは京か大阪の、夢はいつでも東都あづまなるべし。

其三十

十兵衛傷を負ふて歸つたる翌朝、平生いつもの如く夙とく起き出づればお浪驚いて急にとゞめ、まあ滅相な、緩ゆるりと臥むでおいでなされおいでなされ、今日は取りわけ朝風の冷たいに破傷風にでもなつたら何となさる、どうか臥むで居て下され、お湯ももう直沸きませうほどに含嗽うがひてうづ手水も其所で妾が為せてあげませう、と破土やぶれべつ竈ひにかけたる羽は虧かけ釜の下焚きつけながら気を揉んで云へど、

一向平氣の十兵衛笑つて、病人あしらひにされるまでの事はない、手拭だけを絞つて貰へば顔も一人で洗ふたが好い氣持ぢや、とたが籠かごの緩みし小盥こくわんに自ら水を汲み取りて、別段悩める容態やうすも無く平日ふだんの如く振舞へば、お浪は呆れ且つ案ずるに、のつそり少しも頓着とんちやくせず朝あさめし食終ふて立上り、突然いきなり衣物を脱ぎ捨て、股引腹掛つかけ着にかゝるを、飛んでも無い事何処へ行かるゝ、何程仕事の大事ぢやとて昨日の今日は疵口の合ひもすまいし痛みも去るまじ、泰然ぢつとして居よ身体を使ふな、仔細は無けれど治癒なほるまでは万般よろづ要つゝ慎し第一と云はれた御医者様の言葉さへあるに、無理むり圧おさして感応寺に行かるゝ心か、強過ぎる、仮令行つたとて働きはなるまじ、行かいでも誰が咎めう、行かで済まぬと思はるゝなら妾ちよとが一寸一走り、お

上人様の御目にかゝつて三日四日の養生を直に願ふて来ましよ、御慈悲深いお上人様の御承知なされぬ氣遣ひない、かならず大切だいじにせいかるはずみ 軽か 拳こすなど仰やるは知れた事、さあ此衣これを着て家に引籠み、せめて疵口くちの悉皆密着すつかりくつくまで沈静おちついて居て下され、と只管とゞめ宥め慰め、脱ぎしをとつて復被またきすれば、余計な世話を焼かずとよし、腹掛着せい、これは要らぬ、と利く右の手にて撥ね退くる。まあ左様云はずと家に居て、とまた打被する、撥ね退くる、男は意気地女は情、言葉あらそひ果しなければ流石にのつそり少し怒つて、訳の分らぬ女の方で邪魔立てするか忌しい奴、よし〜頼まぬ一人で着る、高の知れたる蚯蚓みづばれ膨ふに一日なりとも仕事を休んで職人共かみの上に立たてるか、汝うぬは少も知ちるまいがの、此十兵衛

はおろかしくて馬鹿と常　云はるゝ身故に職人共が軽う見て、眼
 の前では我が指揮さしづに従ひ働くやうなれど、蔭では勝手に怠惰なまけるや
 ら譏そしるやら散　に茶にして居て、表面うはべこそ粧つくろへ誰一人眞実仕事を
 好くせうといふ意氣組持つて仕てくるゝものは無いは、忽々情無
 い、如何かして虚飾みえで無しに骨を折つて貰ひたい、仕事に膏あぶらを乗
 せて貰ひたいと、諭せば頭は下げながら横向いて鼻で笑はれ、叱
 れば口に謝罪られて顔かほつき色に怒られ、つく／＼我折つて下手に
 出れば直と増長さるゝ口惜さ悲しさ辛さ、毎日　棟梁　と大
 勢に立てられるは立派で可けれど腹の中では泣きたいやうな事ば
 かり、いつそ穴鑿りこで引使はれたはうが苦しいと思ふ位、其
 中で何か斯こか此こ日まで運ばして来たに今日休んでは大事の躓こき、

胸が痛いから早帰りします、頭痛がするで遅くなりましたと皆にみんな怠惰なまけられるは必定、其時自分が休んで居れば何と一言云ひ様なく、仕事しごとが雨垂拍子になつて出来べきものも仕損ふ道理、万が一にも仕損じてはお上人様源太親方に十兵衛の顔が向られうか、これ、生きても塔たかが成できねばな、此十兵衛は死んだ同然、死んでも業を仕遂すいげれば汝うぬが夫おやぢは生て居るはい、二寸三寸の手斧傷に臥て居られるか居られぬ歟、破傷風が怖い歟仕事の出来ぬが怖い歟、よしや片腕奪られたとて一切成就の暁までは駕籠に乗つても行かでは居ぬ、ましてや是しきの蚯蚓膨ふくらに、と云ひつゝお浪が手中より奪さらひとつたる腹掛に、左の手を通さんとしてしか顰しむる顔、見るに女房の争へず、争ひまけて傷をいたはり、遂に半天股引まで着せて

出しける心の中、何とも口には云ひがたかるべし。

十兵衛よもや来はせじと思ひ合ふたる職人共、ちらりほらりと辰の刻頃より来て見て吃驚する途端、精出して呉るゝ嬉しいぞ、との一言を十兵衛から受けて皆冷汗をかきけるが、是より一同励み勤め昨日に変わる身のこなし、一をきいては三まで働き、二と云はれしには四まで動けば、のつそり片腕の用を欠いて却て多くの腕を得つ日 工事抄取り、肩疵治る頃には大抵塔も成あがりぬ。

其三十一

時は一月の末つ方、のつそり十兵衛が辛苦経営むなしからで、

感応寺生雲塔いよ／＼物の見事に出来上り、段 足場を取り除け
 ば次第 　　に露るゝ一階一階また一階、五重巍然ぎぜんと聳えしさま、
 金剛力士が魔軍を睥睨にらんで十六丈の姿を現じ坤こんちくゆる軸動がす足ぶみ
 して巖上いはまに突立ちたるごとく、天晴立派に建つたる哉、あら快よ
 き細工振りかな、希有ぢや未曾有ぢや再またあるまじと爲右衛門より
 門番までも、初手のつそりを軽しめたる事は忘れて讚歎すれば、
 圓道はじめ一いつさん山の僧徒も躍りあがつて歡喜よろこび、これでこそ感応
 寺の五重塔なれ、あら嬉しや、我等が頼む師は当世に肩を比すべ
 き人も無く、八宗九宗の碩德せきとく達たち虎豹鶴鷺こへうかくろと勝ぐれたまへる中に
 も絶類拔群にて、譬へば獅子王孔雀王、我等が頼む此寺の塔も絶
 類拔群にて、奈良や京都はいざ知らず上野浅草芝山内、江戸にて

此塔これに勝るものなし、殊更塵土に埋もれて光も放たず終るべかりし男を拾ひあげられて、心の宝珠たまの輝きを世に発出いだされし師の美德、困苦たげに撓たげまず知己に酬いて遂に仕遂げし十兵衛が頼もしさ、おもしろくまた美はしき奇因縁なり妙因縁なり、天の成せしか人の成せし歟か將又諸天善神の蔭にて操り玉ひし歟、屋をくを造るに巧妙たくみなりし達膩伽尊者たにかそんじやの噂はあれど世尊在世の御時にも如是かく快き事ありしを未だきかねば漢土からにもきかず、いで落成の式あらば我偈げを作らむ文を作らむ、我歌をよみ詩を作なして頌せむ讚せむ詠ぜむ記せむと、各 互に語り合ひしは慾のみならぬ人間ひとの情の、やさしくもまた殊勝なるに引替へて、測り難きは天の心、圓道爲右衛門二人が計らひとしていと盛んなる落成式 執しふぎやう行の日も略定まり、

其日は貴賤男女の見物をゆるし貧者に剩れるあま金を施し、十兵衛其
 他を犒ねぎらひ賞する一方には、また伎楽を奏して世に珍しき塔供養
 あるべき筈に支度とり／＼なりし最中、夜半の鐘の音の曇つて
 平日つねには似つかず耳にきたなく聞えしがそもく、漸　《ぜん／＼》
 あやしき風吹き出して、眠れる児童も我知らず夜具踏み脱ぐ
 ほど時候生暖かくなるにつれ、雨戸のがたつく響き烈しくなりま
 さり、闇に揉まるゝ松柏の梢に天魔の号さけびものすごくも、人の心
 の平和を奪へ平和を奪へ、浮世の栄華に誇れる奴等の胆を破れや
 睡りを攪みだせや、愚物の胸に血の濤打なみたせよ、偽物の面の紅き色奪
 れ、斧持てる者斧を揮へ、矛もてるもの矛を揮へ、汝等が鋭とき劍
 は餓えたり汝等劍に食をあたへよ、人の膏血あぶらはよき食なり汝等劍

に飽まで喰はせよ、飽まで人の膏膩を餌かへと、号令きびしく発するや否、猛風一陣どつと起つて、斧をもつ夜叉矛もてる夜叉餓えたる剣もてる夜叉、皆一斉に暴れ出しぬ。

其三十二

長夜の夢を覚まされて江戸四里四方の老若男女、悪風来りと驚き騒ぎ、雨戸の横柄よこざら子るしつか緊乎と挿せ、辛張棒を強く張れと家ごとうろたに狼狽ゆるを、可愍あはれとも見ぬ飛天夜叉王、怒号の声音たけ／＼しく、汝等人を憚るな、汝等人間ひとに憚られよ、人間は我等を軽んじたり、久しく我等を賤みたり、我等に捧ぐべき筈の定めにへの牲を

忘れたり、這ふ代りとして立つて行く狗、驕奢おごりねぐらの罅巢すき作れる禽とり、
 尻尾しりをなき猿、物言ふ蛇、露誠実まことなき狐の子、汚穢けがれを知らざる豕いのこの
 女め、彼等に長く侮られて遂に何時まで忍び得む、我等を長く侮ら
 せて彼等を何時まで誇らすべき、忍ぶべきだけ忍びたり誇らすべ
 きだけ誇らしたり、六十四年は既に過ぎたり、我等を縛せし機運
 の鉄鎖、我等を囚へし慈忍にんの岩窟いはやは我が神力にて 皮を剥ぎ取
 れ、肉を剥ぎとれ、彼等が心臓しんを鞣うとして蹴よ、枳棘からたちをもて脊
 を鞣うてよ、歎息の呼吸涙の水、動悸の血の音悲鳴の声、其等をす
 べて人間ひとより取れ、残忍の外快樂なし、酷烈ならずば汝等疾く死
 ね、暴れよ進めよ、無法に住して放逸無慚無理無体に暴れ立て暴
 れ立て進め進め、神とも戦へぶつも擲け、道理を壊やぶつて壊りすて

なば天下は我等がものなるぞと、叱し 豎じゆりつ立なし、柳は倒れ竹は
 割るゝ折しも、黒雲空に流れて檜の実よりも大きなる雨ばらりノ
 へと降り出せば、得たりとますゝ暴るゝ夜叉、垣を引き捨て塀
 を蹴倒し、門をも破こはし屋根をもめくり軒端の瓦を踏み砕き、唯一
 揉に屑屋を飛ばし二揉み揉んでは二階を捻ぢ取り、三たび揉んで
 は某なにがしでら寺を物の見事に潰つぶし崩し、どうゝどつと鬨ときをあぐる其
 度毎に心を冷し胸を騒がす人の、彼に気づかひ此に案ずる笑止
 の様を見ては喜び、居所さへも無くされて悲むものを見ては喜び、
 いよゝゝ凶に乗り狼藉のあらむ限りを逞しうすれば、八百八町百
 万の人みな生ける心地せず顔色さらにあらばこそ。

中にも分けて驚きしは圓道爲右衛門、折角僅に出来上りし五重

塔は揉まれ揉まれて九輪は動き、頂上の宝珠は空に得読めぬ字を
 書き、岩をも転ばすべき風の突掛け来り、楯をも貫くべき雨の打ぶ
 付つかり来る度撓む姿、木の軋る音、復もとる姿さま、又撓む姿、軋る音、今
 にも傾くつがへ覆らへんず様子に、あれく危し仕様は無きか、傾覆られ
 ては大事なり、止むる術も無き事か、雨さへ加はり来りし上周囲
 に樹木もあらざれば、未曾有の風どだいに基礎狭くて丈のみ高き此塔の
 堪こらへむことの覚束なし、本堂さへも此程に動けば塔は如何ばかり
 ぞ、風を止むる呪文はきかぬか、かく恐ろしき大暴風雨に見舞に
 来べき源太は見えぬ歟、まだ新しき出入なりとて重 来では叶は
 ざる十兵衛見えぬか寛怠なり、他ひとさへ斯かほど様氣づかふに己せが為し塔
 気にかけてぬか、あれく危し又撓むだは、誰か十兵衛招びに行け、

といへども天に瓦飛び板飛び、地上に砂利の舞ふ中を行かむといふものなく、漸く賞美の金に飽かして掃除人の七藏爺を出しやりぬ。

其三十三

耄碌頭巾に首をつゝみて其上に雨を凌がむ準備よういの竹の皮笠引被り、鳶子とんび合羽に胴締して手ごろの杖持ち、恐こは怖こはながら烈風強雨の中を駈け抜けたる七藏爺おやぢ、やうやく十兵衛が家にいたれば、これはまた酷い事、屋根半分は既疾もうとうに風に奪られて見るさへ気の毒な親子三人の有様、隅の方にかたまり合ふて天井より落ち来る

点滴しじくの飛沫しづきを古筵ふるいざで僅よに避け居る始末に、扱あものつそりは氣に
 働はたららきの無い男と呆あはれ果つゝ、これ棟梁殿、此暴風雨あらしに左様して
 居られては濟いむまい、瓦が飛ぶ樹が折れる、戸外おもては全然まるで戦争のや
 うな騒さわぎの中に、汝の建てられた彼塔は如何あらうと思はるゝ、
 丈は高し周圍に物は無し基礎どだいは狭し、何どの方角から吹く風をも正ま
 面ともに受けて揺れるは揺れるは、旗竿ほどに撓たがむではきちくと材き
 の軋ゆる音の物凄しさ、今にも倒れるか壊れるかと、圓道様も爲右衛
 門様も胆を冷したり縮ましたりして氣が氣では無く心配して居ら
 るゝに、一体ならば迎むかひなど受けずとも此天変を知らず顔では濟
 まぬ汝が出て来ぬとは余あんまりな大勇、汝の御蔭で險けん難のんな使を吩
 咐おんかり、忌いしい此瘤しこを見て呉れ、笠は吹き攫さらはれる全ず濡ぬれには

なる、おまけに木片が飛んで来て額に打付りくさつたぞ、いゝ面の皮とは我がこと、さあゝ一所に来て呉れ来て呉れ、爲右衛門様圓道様が連れて来いとのお命令おいひつけだは、ゑゝ吃驚した、雨戸が飛んで行って仕舞ふたのか、これだもの塔が堪るものか、話しする間にも既倒れたか折れたか知れぬ、愚図　せずと身支度せい、疾くゝと急り立つれば、傍から女房も心配気に、出て行かゝら途中が危険あふない、腐つても彼火事頭巾、あれを出しましよ冠つてお出なされ、何が飛んで来るか知れたものではなし、外見みえよりは身が大切だいじ、何程檻樓いくらでも仕方ない刺子絆纏さしこぼんでんも上に被ておいでなされ、と戸棚がたゝ明けにかゝるを、十兵衛不興氣の眼でぢつと見ながら、あゝ構ふてくれずともよい、出ては行かぬは、風

が吹いたとて騒ぐには及ばぬ、七藏殿御苦勞でござりましたが塔
 は大丈夫倒れませぬ、何の此程の暴風雨で倒れたり折れたりする
 やうな脆いものではござりませぬば、十兵衛が出掛けてまゐるに
 も及びませぬ、圓道様にも爲右衛門様にも左様云ふて下され、大
 丈夫、大丈夫でござります、と泰おちつき然はらつて身動きもせず答ふ
 れば、七藏少し膨れ面して、まあ兎も角も我と一緒に来て呉れ、
 来て見るがよい、彼の塔のゆさ／＼きち／＼と動くさまを、此処
 に居て目に見ねばこそ威張つて居られるれ、御開帳の幟のぼりのやうに頭
 を振つて居るさまを見られたら何程なんぼ十兵衛殿寛おうやう濶な気性でも、
 お気の毒ながら魂たましひ魄ひがふはり／＼とならるゝであらう、蔭で強
 いのが役にはたゝぬ、さあ／＼一所に來たり來たり、それまた吹

くは、嗚呼恐ろしい、中 止みさうにも無い風の景色、圓道様も爲右衛門様も定めし肝を煎つて居らるゝぢやろ、さつさと頭巾なり絆纏なり冠るとも被るともして出掛けさつしやれ、と遣り返す。大丈夫でござりまする、御安心なさつて御帰り、と突撥る。其の安心が左様手易くは出来ぬわい、と五月蠅云ふ。大丈夫でござりまする、と同じことをいふ。末には七藏焦れこむで、何でも彼でも来いといふたら来い、我の言葉とおもふたら違ふぞ圓道様爲右衛門様の御命令ぢや、と語気あらくなれば十兵衛も少し勃然^{むっ}として、我は圓道様爲右衛門様から五重塔建ていとは命令かりませぬ、御上人様は定めし風が吹いたからとて十兵衛よべとは仰やりますまい、其様な情無い事を云ふては下さりませぬ、若も御上人様

までが塔危いぞ十兵衛呼べと云はるゝやうにならば、十兵衛一期の大事、死ぬか生きるかの瀬門せとに乗かゝる時、天命を覚悟して駈けつけませうなれど、御上人様が一言半句十兵衛の細工を御疑ひなさらぬ以上は何心配の事も無し、余の人たちが何を云はれうと、紙を材きにして仕事もせず魔術てづまも手抜もして居ぬ十兵衛、天氣のよい日と同じことに雨の降る日も風の夜も樂として居りまする、暴風雨が怖いものでも無ければ地震が怖うもござりませぬと圓道様にいふて下され、と愛想なく云ひ切るにぞ、七藏仕方なく風雨の中を駈け抜けて感応寺に帰りつき圓道爲右衛門に此よし云へば、さても其場に臨むでの智慧の無い奴め、何故其時に上人様が十兵衛来いと仰せぢやとは云はぬ、あれゝ彼揺るゝ態を見よ、汝きさま

までがのつそりに同化かふれて寛怠過ぎた了見ぢや、是非は無ない、も一度行つて上人様の御言葉ぢやと欺誑たばかり、文句いはせず連れて来い、と圓道に烈しく叱られ、忌しさに独語つふやきつゝ七藏ふたゝび寺門を出でぬ。

其三十四

さあ十兵衛、今度は是非に來よ四の五のは云はせぬ、上人様の御召ぢやぞ、と七藏爺いきりきつて門口から我鳴れば、十兵衛聞きくより身を起して、なにあの、上人様の御召なさるとか、七藏殿それは真実まことでござりまするか、嗚呼なさけ無い、何程風の強けれ

ばとて頼みきつたる上人様までが、此十兵衛の一心かけて建てた
 ものを脆くも破壊るゝ歟こはのやうに思し召されたか口惜しい、世界
 に我を慈悲の眼で見下さるゝ唯一つの神とも仏ともおもふて居
 た上人様にも、真底からは我が手腕うでたしかと思はれざりし歟、つ
 く／＼頼母しげ無き世間、もう十兵衛の生き甲斐無し、たま／
 々ならびに双なき尊き智識に知られしを、是れ一生の面目とおもふ
 て空あだに悦びしも真に果敢無き少時しばしの夢、嵐の風のそよと吹けば丹
 誠凝らせし彼塔も倒れやせむと疑はるゝとは、ゑゝ腹の立つ、泣
 きたいやうな、それほど我は腑やっの無い奴か、恥をも知らぬ奴と見
 ゆる歟、自己おのれが為たる仕事はぢが恥辱を受けてものめくゝ面押拭ふて
 自己は生きて居るやうな男と我は見らるゝ歟、仮令ば彼塔倒れた

時生きて居やうか生きたからう歟、ゑゝ口惜い、腹の立つ、お浪、
 それほど我が鄙さもしからうか、嗚呼 生命も既もういらぬ、我が身体
 にも愛想の尽きた、此世の中から見放された十兵衛は生きて居る
 だけ恥辱はぢをかく苦悩くるしみを受ける、ゑゝいつその事塔も倒れよ暴風雨
 も此上烈しくなれ、少しなりとも彼塔に損じの出来て呉れよかし、
 空吹く風も地打つちつ雨も人間ひとほど我には情無つれなからねば、塔破壊こはされ
 ても倒されても悦びこそせめ恨はせじ、板一枚の吹きめくられ釘
 一本の抜かるゝとも、味気無き世に未練はもたねば物の見事に死
 んで退けて、十兵衛といふ愚魯漢ばかものは自己が業てぬかりの粗漏とぬかりより恥辱を
 受けても、生命惜しさに生いき存ながらへて居るやうな鄙劣けちな奴では無
 かりしか、如是かゝる心を有つて居しかと責めては後とむらにて吊はれむ、一

度はどうせ捨つる身の捨処よし捨時よし、仏寺を汚すは恐れあれど我が建てしもの壞れしならば其場を一步立去り得べきや、諸仏菩薩も御許しあれ、生雲塔の頂てつぺん上より直ちに飛んで身を捨てむ、投ぐる五尺の皮かはぶくろ囊は潰れて醜かるべきも、きたなきものを盛つては居らず、あはれ男児をとこの醇いつぽんぎ粹、清浄の血を流さむなれば愍然ふびんともこそ照覧あれと、おもひし事やら思はざりしや十兵衛自身も半分知らで、夢路を何時の間にか辿りし、七藏にさへ何処でか分れて、此所は、おゝ、それ、その塔なり。

上りつめたる第五層の戸を押明けて今しもぬつと十兵衛半身あらはせば、礫を投ぐるが如き暴雨の眼も明けさせず面を打ち、一ツ残りし耳までも 《がうく》たる風の音のみ宇宙に充て物騒

がしく、さしも堅固の塔なれど虚空に高く聳えたれば、どうく
 どつと風の来る度ゆらめき動きて、荒浪の上に揉まるゝ棚無し小
 舟のあはや傾覆らむ風情、流石覚悟を極めたりしも又今更におも
 はれて、一期の大事死生の岐路ちまたと八万四千の身の毛豎よだたせ牙咬定かみし
 めて眼まなこを睜みはり、いざ其時はと手にして来し六分鑿のみの柄忘るゝばか
 り引握むでぞ、天命を静かに待つとも知るや知らずや、風雨いと
 はず塔の周囲めぐりを幾度となく徘徊する、怪しの男一人ありけり。

其三十五

去る日の暴風雨は我等生れてからこの以来かた第一の騒なりしと、常

は何事に逢ふても二十年前三十年前にありし例をひき出して古きを大袈裟に、新しきを訳も無く云ひ消す氣質かたぎの老人としよりさへ、真底我折つて噂仕合へば、まして天変地異をおもしろづくで談話はなしの種子にするやうの剽軽な若い人は分別も無く、後腹の疾まぬを幸ひ、何処の火の見が壊れたり彼処の二階が吹き飛ばされたりと、他の憂ひ災難を我が茶受とし、醜態ざまを見よ馬鹿慾から芝居の金主して何某め痛い目に逢ふたるなるべし、さても笑止彼の小屋の潰れ方はよ、又日頃より小面憎かりし横町の生花の宗匠が二階、御神楽だけの事はありしも気味きびよし、それよりは江戸で一二といはるゝ大寺の脆く倒れたも仔細こそあれ、実は檀徒から多分の寄附金集めながら役僧の私曲わたくし、受負師の手品、そこにはその有りし由、

察するに本堂の彼の太い柱も桶でがな有つたらうななどと様
の沙汰に及びけるが、いづれも感応寺生雲塔の釘一本ゆるまず板一
枚剥がれざりしには舌を巻きて讚歎し、いや彼塔あれを作つた十兵衛
といふは何とえらいものではござらぬ歟、彼塔倒れたら生きては
居ぬ覚悟であつたさうな、すでの事に鑿ふく脚んで十六間真逆しまに
飛ぶところ、欄干てすりを斯う踏み、風雨を睨んで彼程の大揉の中に泰ち
然と構へて居たといふが、其一念でも破壊るまい、風の神も大方
血眼で睨まれては遠慮が出たであらう歟、甚五郎このかたの名人
ぢや真の棟梁ぢや、浅草のも芝のもそれ／＼損じのあつたに一
寸一分歪みもせず退ずりもせぬとは能う造つた事の。いやそれにつ
いて話しのある、其十兵衛といふ男の親分がまた滅法えらいもの

で、若しも些ちとなり破壊れでもしたら同職なかもの恥辱知合の面汚し、汝うぬはそれでも生きて居られうかと、到底とても再度鉄槌も手斧も握る事の出来ぬほど引叱つて、武士で云はば詰腹同様の目に逢はせうと、ぐる／＼大雨を浴びながら塔の周囲を巡つて居たさうな。いや／＼、それは間違ひ、親分では無い商売かたき上敵ぢやさうな、と我れ知り顔に語り伝へぬ。

暴風雨のために準備したく狂ひし落成式もいよく済みし日、上人わざ／＼源太を召よび玉ひて十兵衛と共に塔に上られ、心あつて雛僧こぞうに持たせられし御筆に墨汁すみしたゝか含ませ、我此塔に銘じて得させむ、十兵衛も見よ源太も見よと宣のたまひつゝ、江都かうとの住人十兵衛之を造り川越源太郎之を成す、年月日とぞ筆太に記し了られ、満面

に笑を湛へて振り顧り玉へば、兩人ともに言葉なくたゞ平伏して
 拝謝をがみけるが、それより宝塔長とこしなへに天に聳えて、西より瞻みれば飛
 檐えん或時素月を吐き、東より望めば勾欄夕に紅日を呑んで、百有余
 年の今になるまで、譚はなしは活きて遺りける。

(明治二十四年十一月—二十五年三月・四月「国会」)

青空文庫情報

底本：「日本現代文學全集 6 幸田露伴集」講談社

1963（昭和38）年1月19日初版第1刷発行

1980（昭和55）年5月26日増補改訂版第1刷

初出：「国会新聞」

1891（明治24）年11月～1892（明治25）年4月

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記を新字、旧仮名にあらためました。

入力：kompass

校正：浅原庸子

2004年11月3日作成

2009年7月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

五重塔

幸田露伴

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>